
消失した記録～ロストメモリー～

風鈴龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消失した記録～ロストメモリー～

【Zコード】

Z2189Y

【作者名】

風鏑龍

【あらすじ】

荒廃した世界・・・魔王を名乗る者が現れ・・・魔物を統べている・・・

過去に一度、魔王と討伐せんと立ち上がる者達が居たが・・・

その者達は大きな戦いの最中に消えて・・・長い時が過ぎた・・・

少年は記憶を失い、河原で倒れているのをとあるギルドに保護される・・・

そこで出会った少女・・・同じよう記憶を無くしていく・・・

そして、お互に懐かしさを感じ合う・・・不思議な出会い・・・少年と少女は記憶を探す為に行動を共にする事にした・・・助けてくれたギルドへ、せめてもの償いとして銃使いとして加入了た。

運命は遠い過去に紡がれていた。

しかし途中でその運命は停止していた・・・

少年と少女は出会い・・・停止していた運命がまた動き出す・・・人間は破壊と創造を繰り返し・・・何度も同じ過ちを犯し続ける・・・

少年と少女は・・・どんな運命を紡ぐだろうか・・・人間と同じ・・・破壊の運命を紡ぎ、滅亡を迎えるのだろうか?

それとも・・・・・・

ハンゲームのサークル「自作小説投稿所」と言う所にも投稿しています。

第零話（前書き）

注

第零話となつておりますが、この部分は読まなくとも大丈夫です。

と書つかこのロストメモリーが完結後に、

この小説の続きを書くので、それの為の奴とでも考えてください。

選択肢を選ばないといつ選択肢は存在しない。

選択肢を選ばないといつの“選択肢を選ばない”といつ選択肢を選んだ事になるのだから…

？？？ 「はあーだるいわあ…

金髪の女性が机にもたれ掛かり、机の上に置いてある書類を横に追い遣る。

美しい金髪がせりつと流れるかの様にゆれる。

？？？ 「駄目ですよー、ちやんと仕事してくださいよー

そんな金髪の女性を注意する黒髪の頭に天使の輪を浮べ、

布をそのまま纏っているかの様な服を着用した女性。

？？？ 「だあつてえ、世界の管理なんてつまらないんだもん、ねえねえガブちやあーん

猫なで声で金髪の女性がガブちゃん…もとい、ガブリエルに話しかける。

ガブリエル 「はあ…アーティナー様…仕事してください…

大きな溜息をつきながらガブリエルはアテナーが机の墨に追い遣つた書類を手に取る。

アテナー 「ええーガブちやあーん、アテナもしくはアテネって呼んでよお~」

頬を膨らませて子供の様に駄々をこねるアテネ…見た目は大人の女性なのだが…

ガブリエル 「アテナー様…この書類を……」

手にとつて見た書類を見て、一瞬で表情を引き締め、アテナーを見るガブリエルだが、

アテナー 「ふんつ」

頬を膨らませて、そつぽを向いているアテナーが視界に入った。

ガブリエル 「…アテネ様…」

ここは自分が折れなければ話が進まないと仕方なくアテネと呼ぶ。

アテネ 「なあ~に?」

とたんに満面の笑顔になるアテナー…もといアテネ。

ガブリエル 「この書類の世界なのですが…」

凄く癪なのが、こんな子供っぽい事をしているふざけた人でも、

一応はガブリエルの上司に当たる人物である。

出来る事なら今すぐにでもアイテール様に土下座しても上司をチ
ェンジして貰いたいのだが、

アイテール様じきじきのお願いでアーテナーの下についているので
チエンジして欲しいなどいえるはずがない。

アテネ 「ん~…ん? 何々? うわあ…世紀末みたいな世界ねえ」

ガブリエルが渡した書類をせつと見ると、アテネは溜息をついた。

アテネ 「ここの世界がどうしたの?」

ガブリエル 「いえ、その世界の人間の中の、
と言う者な
のですが」

アテネ 「ここの子? ここの子がどうし…ああ、無断に魂が改造さ
れてるじゃない、

誰よこんな事したの、天国と地獄にどやされるじゃない
いつ!」

ガブリエル 「それが、その魂は人間の手によつて改造されたみたい
いなので…」

アテネ 「人間が魂の改造なんて出来る訳無いじゃない、ふざ
けてる?」

ガブリエル 「いえ、それが元人間で今現在は強大な魔力をもつた魔王になっている様で」

アテネ 「成る程、その魔王が息子の魂を改造して輪廻の機構リインカーネーションから外れた魂を作り出したのね…」

ガブリエル 「ええ、それに肉体の強化と改造の所為か死ににくいでし…」

アテネ 「この人間、このままでは輪廻を狂わせてしまつのでは？」

アテネ 「ん…この子が死んだら別の世界に転生させて魂の修復を図つてから

天国なり地獄なりに送るのが良いわね、このまま送つたら刎ねられるわ」

ガブリエル 「刎ねられる…ですか？何がです？」

アテネ 「私の首とか私の首とか私の首とかね」

ガブリエル 「それは…笑顔で答える事なのですか？」

アテネ 「大丈夫よ、とりあえずこの世界のこの子の監視頼むわね、

その子が死んだら魂を、輪廻の間に送つといでね」

ガブリエル 「はあ…この と言う人間、強化されて人外チックになつてゐるのですが

死ぬなんて事があるのですか？」

アテネ 「大丈夫よ？死ぬと言つより世界に拒絶されると思つわ」

ガブリエル 「それは…未来透視ですか？それとも予想ですか？」

アテネ 「予想よ？その性格だと、多分過去と未来の狭間辺りに落ちて世界に拒絶されるわね」

ガブリエル 「はあ…とりあえずアテネ様の言つとおりに致します」

アテネ 「よひしくねー」

ガブリエルが退室していく後、アテネはニヤニヤとした笑いを浮べながら呟く。

アテネ 「」これで合法的に人間を転生させて遊べるわねえ…
ふふつ楽しみだわあ

早く死ないかしら？」

第一話 田覚め（前書き）

荒廃した世界・・・魔王を召喚する者が現れ・・・魔物を統べている・・・

過去に一度、魔王と討伐せんと立ち上がる者達が居たが・・・

その者達は大きな戦いの最中に消えて・・・長い時が過ぎた・・・

少年は記憶を失い、河原で倒れているのをとあるギルドに保護される・・・

そこで出会った少女・・・同じようだ記憶を無くしていく・・・
そして、お互いに懐かしさを感じ合う・・・不思議な出会い・・・
少年と少女は記憶を探す為に行動を共にする事にした・・・
助けてくれたギルドへ、せめてもの償いとして銃使いとして加入了。

運命は遠い過去に紡がれていた。

しかし途中でその運命は停止していた・・・

少年と少女は出会い・・・停止していた運命がまた動き出す・・・
人間は破壊と創造を繰り返し・・・何度も同じ過ちを犯し続ける・・・

少年と少女は・・・どんな運命を紡ぐだろうか・・・
人間と同じ・・・破壊の運命を紡ぎ、滅亡を迎えるのだろうか？

それとも・・・

第一話　目覚め

うつすらと感覚が戻り、体中に違和感を感じる・・・

動けない・・・体が動かない・・・ここは何処だらうか？

体はまるで鉛の様に重く、拘束されているのでは？と思つ程である・・・

川の流れる音がする・・・川原だらうか？

そこまで思い至つた・・・しかし、そこで意識は急激に暗闇に沈んで行く・・・

ここは人が行き着いた先・・・遠い遠い未来の物語。

人々が行き着いたのは天国でも桃源郷でも無く。

何もない・・・荒廃した世界・・・

人々は魔力を科学的に生み出し、その魔力から魔法を生み出した・・・

より肉体的に優れた種を・・・人々はDNAを弄り・・・獣人を生み出した・・・

機械こそ至極・・・機械に知能を与え・・・それが裏目に出て・・・
殺戮機械が完成した・・・
キルリングマシーン

魔法によって突然変異を起こしたウイルスによって魔物が生まれ。そして魔王が現れ・・・世界は腐敗し破滅を迎える。

貴方なら・・・そんな世界で何を求めますか？

うつすらと目を開ける・・・意識がゆっくりと起動を始める・・・「こ」は何処だらう？

？？？ 「大丈夫？」

声をかけられ・・・初めて人が居るのに気がつく・・・

声を発した者は白衣を来た女性である・・・「こ」で意識が完全に起動した・・・

白衣の女性 「大丈夫？」

もう一度聞かれた・・・とりあえず答えようと思いつの口を開くが・・・

？？？ 「大丈夫です・・・」

体中に違和感を感じるが、特に動かなかつたりはしないのでそう答える。

白衣の女性 「ん・・・まあ、特に怪我は無いみたいだし・・・大丈夫よね・・・」これは何本？

女性は何かの紙に色々書いてから、指を一本立てて田の前に立て質問してきた。

？？？ 「一本・・・」

「一本」と答えるも何の特にもならなそつなので、

特に捻くれもせざ正直に答える。

白衣の女性 「正解・・・じゃ、これは何?」

女性は手に持ったボールペンをひらひら見せてきた。

？？？ 「ボールペン」

これも正直に答える

白衣の女性 「じゃ、使ってみて」

女性はノック式のボールペンを差し入れしてみた・・・

カチヤツカチヤツとペン先を出し入れしてみる・・・

白衣の女性 「ん~・・・大丈夫と、名前は?」

ここに来て名前を聞くのか・・・普通は最初に聞くのではないのだろうか?

とつあえず自分の名前を答える」とこした

？？？

「 知前は・・・なま・・・」

言葉に詰まる・・・思い出せない・・・

白衣の女性 「 どうしたの？まさかわからないとか」

女性は笑いながら聞いてくる。

？？？ 「 ・・・」

「 」 が何も答えない女性は笑うのをやめ、真剣に が見れる。

白衣の女性 「 まさか・・・マジでわからな感じ？」

？？？ 「 ・・・はー」

返事をしながらも思考の海に潜り込んでいく・・・

自分は誰だ？

第一話 出会い

自分の名前を思い出せず・・・殆どの事は思い出すことも出来ない・
・記憶喪失・・・

だけれども、一部思い出せる部分があった・・・断片的だが・・・
高い所から落ちていてる時の映像・・・

何故落ちていたのかはわからない。

ただ、思い出せたのは、高い所から落ちていてる時の浮遊感と・・・

水に叩きつけられた時の衝撃・・・

それと、落ちている時にもう一人居た・・・茶髪の活潑そうな印象
の 少女。

その少女の名も思い出せない・・・しかし・・・なぜかその少女は
とても親しい人物だと感じた・・・

何故だかはわからない・・・唯、その少女は自分が水面に叩きつけ
られる随分前に喪失していた・・・

記憶が断片的なので状況がまったくわからなかつたが・・・

これは憶測であるが・・・

多分、自分はその少女と何かをしていた 何かをしようとしてい

たのだれい。

しかし、その途中で高い所から落び・・・落とされた?・・・そして、

その少女は落下の途中で何かの魔法を使って助かり、

自分は魔法を使う余裕も無く水面に叩きつけられたのだろう?・・・

そして、そこには自分が倒れていた河原の上流だったのであるが。

そこから流れ、偶然にもあの河原にたどり着いた・・・そう考えるのが普通ではないだろうか?

河原に倒れていた自分を助けてくれたのは「マジックキャバル魔術結社」と言つギルドの隊員であった。

その隊員達はその地域の魔物を討伐する為に組まれたチームであり、

河原に倒れている所を発見した時に、既に力尽きていたと思つたらしい。

しかし、実際には息があつたらしく、咄嗟にここにひつれて来たそうだ。

ここに来てから2日程は寝続けていたらしい・・・

ここは地下に作られた地下都市である。

出入りは基本的に転移装置か魔法か数箇所存在する出入り口で行つ。

目を覚ました場所は地下都市のギルド本部の医療室・・・まあ、いわゆる病院である。

最初に出会った白衣の女性はミラーズと名乗った。

その女性は少年に対しても呼び名が公用だと判断し、一時的にだが

「名無し」と言つて名乗られる事になった。

ミラーズ 「記憶喪失・・・強い衝撃や精神的ショックを起こした時に起かる病気の一種ね・・・

ただ・・・水面に叩きつけられた時の衝撃は相当な物だと思つただけれど・・・

体に目立つた打撲が無いのは何故かしら?」

名無しの腕や足や背をべたべたと触つて外傷を確認するが、特に外傷らしい外傷も無い・・・

今まベッドに腰掛、ミラーズを向かい合つて座つている。

ミラーズ 「うーん・・・所持品からして銃使いなんだろ?ナビ・・・」の銃つて物凄い旧式なのよ ね・・・」

ベッドの横の台の上から銃を取り上げる・・・

シンプルな作りのリボルバーである。

不思議な事に普通のリボルバーなら「スイングアウト弾倉振出式」か「トップブレイク中折れ式」、
もしくは「フックドフレーム固定式」のどちらの方法でリロードするはずなのだが、
このリボルバーは回転弾装部分が完全に固定されていて、リロードが出来ない。

理由は魔銃……簡単に言えば魔法と銃をあわせた物であるからである。

回転弾装内に魔法を使って弾丸を精製し、それを撃ち出すタイプの銃である。

ミラー^ズ 「それにこの銃……壊れて……とまではいかないけど、

相當酷使したのか弾装部分がボロボロね……使えない事も無いけど……

これ、貴方の物のはずよ?」

行き成りミラー^ズに銃を投げられたので、心中では慌てそれをとらうとするが……

……その銃はすんなりと名無しの手に収まった……

名無し 「あれ?」

その銃を持った時一瞬何かがフラッシュバックした……

しかし、そのフラッシュバックが何かは良くわからなかつた・・・
一瞬見えた光景は・・・真つ赤な視界の中・・・燃え盛る炎の中に
背に膜の張つた翼を広げた・・・

悪魔の様な・・・逆光で顔は見えなかつたが、影のみでそんな感じ
に見えた・・・

ミラーーズ 「大丈夫？銃を握り締めて・・・何か思い出した？」

考え込んでいる間にミラーーズがこちらを覗き込んでいた・・・

名無し 「え・・・ええ、何か見えた気がしました・・・」

自分の手の中の銃を知らず知らずの内に弄んでいた・・・

ミラーーズ 「それは名無しの物で正解か・・・使い込まれてる銃
ね、旧式だけど」

自分の手の中に納まつてゐる銃はまるで自分の体の延長であるかの
ようだ・・・

ぐるぐると手で弄んでいると誰かやつてきた。

？？？ 「おつ、目が覚めたか・・・で、どうだ？」

やつて来たのは大剣を背中に担いだ青年と自身の身長よりも長い杖
を背に背負つた少女であった・・・

「なつーっ！」

現れた少女は、最後に記憶の中で見た少女にそっくりだった。

第三話 断片的

大規模都市・・・元々はそう呼ばれていた所も今ではこう呼ばれる
「廃都市」と・・・

医療室にやつてきた青年はクルシス、少女はスイレンといつらしこ・
・

クルシス 「状態は？起きてるって事は悪くは無いと思つが・
・」

ミラーズ 「えつと・・・まあ、アレねスイレンと同じような
感じ記憶が飛んでる」

先程メモを取つていた何かの紙を確認しつつ説明を始める。

ミラーズ 「まず身体的外傷は存在しない・・・まあ、無傷つ
て事ね

聞いた話だと高い所から川に落ちたみたいだけ
れども・・・

とりあえず、状況はスイレンと同じ感じね

ミラーズはおでこに手を当てて空・・・まあ、天井だが・・・を見
上げてブツブツと何かを呟き始めた。

スイレン 「こんこちは・・・

スイレンは見た感じ元気で活発そうなイメージだが、今は表情は暗

い・・・

自分と同じ記憶喪失・・・とつあえずおぼろげな記憶の中にスイセ
ンが居た事を話すか・・・

名無し 「あの・・・」

口を開くと真っ先に反応したのはクルシスであった。

クルシス 「どうした? 何か思い出したか?」

期待の眼差しでこちらを見てくれる・・・

名無し 「いえ・・・やつこつ訳では・・・」

期待に答えられそうに無いのでとつあえず謝罪しておぐ。

クルシス 「そつか・・・」

あからさまにがっかりしている・・・とつあえず、完全に期待外れ
とつ訳でもないとと思う・・・

名無し 「とつあえず・・・えつと・・・スイレンちゃん・・
・でしたっけ?・・・

先程ほんの少し覚えている記憶で確かかどうか
わからないのですが・・・

落ちていた少女が居て・・・
崖・・・からかどうかは知りませんが、一緒に

その少女がスイセンさんに似てるんですけど・・・

瓜二つで・・・

スイレン 「…………」

ガシイツと、きなり少女が両肩を掴んできた……

スイレン 「私の事知ってるのー?私は誰!ー?」

ガックンガックンと揺さ振られて、少しひっくりして途切れ途切れに言葉を紡ぐ……

名無し 「おぼろげ、なので、よく、わから……」

ミーラーズ 「スイレン、落ち着きなさい」

少々強引にミーラーズがスイレンを引き剥がす……

クルシス 「大丈夫か?……とりあえずその話を良く聞くか
せてくれ」

名無し 「えと……その少女と一緒になつて落下して……

でも、水面に叩きつけられた時にまだその少女
は居なくて……」

おぼろげな記憶を手繰り寄せて必死になり説明をするが、

「それでもおぼろげで詳しく述べて説明できない……

名無し 「それで……」

ミラーズ 「もう良いわよ・・・とりあえずスイセンと名無しが記憶喪失前に知り合いだったらしいってのがわかつただけで十分ね・・・

名無しとスイセンはこれから一緒に行動しなさい、もしかしたら記憶が回復するかもしれないからね」

スイレン 「はい・・・わかりました・・・

名無し 「えと・・・はい・・・」

とりあえずスイセンと言つ少女と行動を共にすると言つことになつた・・・

ミラーズ 「じゃ、名無しの案内はスイセンとクルシスに任せるわ」

ミラーズはそういうと部屋を出て行つた・・・

クルシス 「んあー・・・ああ、ここは施設について説明・・・の前にここがどういうところか

わかるか?記憶喪失でそういう事まで忘れてるつてのは笑えないからな」

クルシスは名無しとスイレンの二人に話しかけてきているらしい・・・

スイレン 「すいません・・・わからないです・・・」

名無し 「俺も・・・わからないです・・・」

記憶の中を探るが・・・記憶の中に「魔術結社」と「地下都市」と
言つた語は出てこなかつた・・・

クルシス 「あー・・・説明・・・まあ、ここで座つて話す
より、実際に設備を回りながら説明
した方が効率がいいな・・・よし、名無しは歩
けるな?」

名無し 「はい」

クルシス 「じゃ、しつかり着いてこいよ」

名無しはスイレンと共に「魔術結社」のギルドのある、

小型地下都市 「影潜魔法都市」と言つて、
らう事になつた。

第四話 小型地下都市

小型地下都市 「影潜魔法都市」・・・収容可能人数は5～6万人。

生活に必要な設備が整えられている地下都市である。

現在の人口は236人・・・名無しを含めると237人だそうだ。

「魔術結社」ギルドの合計人数は132人である、

内、付近の魔物を討伐したり、廃都市の調査をしている戦闘部隊が68人、

残りの64人は都市内部に存在する大型コンピューターから

まだ何とか生きている人工衛星を使って他の都市のギルドと連携をとる為に通信を担当したり、

ギルドの物資を振り分けたり等の雑用を引き受けている援護部隊である。

都市に居る人の内、36人が獣人である。

獣人の半数はギルドの戦闘部隊に所属している。

ギルドに属さないで街で暮している人々は市民と呼ばれている。

クルシスの説明を一つ一つまとめていく・・・

都市の内部 と言つても基本的な設備のみ を回つて、説明してくれていた。

そして、現在位置は都市内部のギルド本部にあるギルド員の憩いの場のカフェである。

そこで、現在位置は都市内部のギルド本部にあるギルド員の憩いの場のカフェである。

クルシス 「 そりいえば自己紹介してねえな・・・」

俺はクルシスだ、見ての通り戦闘部隊所属の大剣使いだ」

右手を差し出されたのでとりあえずこちらの右手を差し出して、握手を交わす。

名無し 「俺は・・・」

自分も自己紹介をしようとして口を開くが・・・何も思い出せないのでどんな

自己紹介したら良いのかわからず口を開くが・・・スイレンも少し困っているようだ・・・

クルシス 「ああ・・・すまん、記憶喪失なんだよな・・・わりい」

つい口が滑つてしまつたらしい・・・

クルシス

「とにかくで、名無しはこれからどうするんだ？」

今の雰囲気を変えようとクルシスが話題をえてきたのでそれに乗ることにする。

名無し 「わからないです・・・」

新しい話題に食いついたのはいいが、なんて答えていいのかわからない。

クルシス 「あーまあ、そうだよな、記憶喪失でこれからどうするかなんてさ

まあ、スイレンみたいにギルドに入るのもいい

いと悪いぞ？」

名無し 「ギルド・・・？」

ギルドに入る・・・確かにそれはいいかも知れない・・・

記憶喪失で・・・薄っすらと残る記憶にはスイレンと良く似た少女が居て・・・

スイレンも記憶喪失で・・・ギルドに入つていろいろしい・・・

だつたら自分もギルドに入るのが良いのではないのだろうか？

クルシス 「無理にとは言わないな、こここの都市の内部は安全だからな

でもな、お前は武器を持っていたらどう？」田

式のリボルバー・・・

確か名称はF.O.8-10だったか?」

クルシスの言つ通りで、名無しはリボルバーを持っている。

正確には自分の物かわからないが、握つてみた感じは

まるで自分の腕の延長の様な感じで、しつかりと狙つて撃てば百発百中するのでは?

と言つぐらーに自然な感じな握り具合であった。

そのリボルバーをバッグから取り出す。

名無しはクルシスに渡されたこの街での衣服に着替えていて、

その時に一緒になつて渡されたバッグの中に自分の所持品・・・

持つていたのは旧式魔銃F.O.8-10だけであるが・・・

そのリボルバーを取り出す・・・

スイレン 「その銃・・・」

と、スイレンが横から銃を取つて観察し始める・・・

名無し 「えつと・・・」

その様子を眺める・・・特に乱暴に扱つたりせず、「丁寧に扱つていいもので問題はないと思つた。

クルシス

「ん~・・・とりあえず、射的場に行くか・・・

」

椅子から立ち上るとクルシスが建物の奥を指差して言った。

クルシス
つてみろよ
しれないからよ

「あつちに射的場があるからよ、そこで銃を使

クルシスはクルシスなりに氣を利かしてくれているようだ・・・
クルシスの氣遣いを無駄にする訳にはいかないし、
この銃を一度使ってみたかったので射的場に行く事にした。

スイレン
「・・・・・・・

スイレンは銃を返した後も無言であった。

第五話 射撃場

Fog-10とは、安定した魔導銃のベストセラーを作り出した会社が開発した、

変り種の魔導銃である。正式名称「Fog-10 前装式回転式拳銃」

シングルアクションで形状はコルト・シングル・アクション・アーミーと良く似ている。

装弾数は六発、使用最高魔法レベル20、生産数は不明。

特徴は使用者の拳銃使用能力と魔法使用能力に大きく左右される性能である、

そのため取り扱いが難しく、価格も他の魔導銃に比べると高い。

これまで初心者が簡単に扱うことの出来る安定性と信頼性、その上安値と言う安定した魔導銃を作り出していた会社が、何故この様な魔導銃を作り出したかは不明であるが、

「とある物好きの特別注文品であったのでは?」等と噂されている。

その関係か「魔導銃取り扱いの上級者を名乗るにはこの銃を使いこなせなければいけない」と言っていた銃である。

現在では魔銃と言つが、魔法を利用する銃の事を開発当初は魔導銃と言つた。

F 09 - 10を携帯するためのガンベルトを装備して、そこにF 09 - 10を収納し、

射撃場の距離15～35mに設定された100m四方の射撃場の中に立つ。

射的場でやった時は30発中18発命中と、全く当たらなかつたが、

クルシスが「実際の戦場ならもっと良い成績が出るんじゃないかな？」
俺も実際戦場の方が強いからな」

と言つてくれて、ここに射撃場につれてこられたのである。

「この射撃場は、射撃者を中心にして全方向に的が現れる＆

風景を立体映像として映し出して、実際の戦場の様な感じにするとが出来るのである。

その何もない100m四方の部屋の中心部の射撃者が立つ場所に名無しは立っていた・・・

クルシス 「おう、準備は良いなー、命中精度と的中精度、
それと

射撃速度も測るからなー、落ち着いていけよ

見た感じお前ならできるからなー」

射撃場に設置されたスピーカーから響くクルシスの声・・・

クルシス 「んじゃー、アナウンスの後に開始だからなー頑張れよ」

ブツンッとスピーカーの切り替わる音・・・

アナウンス 「これより立体射撃場での射撃訓練を行います。」

無機質な女性の声が響き渡る

アナウンス 「訓練レベル1、訓練場所は森です。射撃レベルが高ければ高い程訓練レベルが上昇します。落ち着いて射撃しましょう。開始します」

ブウンッと辺りの何もない真っ白の部屋の風景が変わり、木々の生い茂る薄暗い森に変わった・・・

その瞬間に体がガチガチになってしまい自分の意思では動かせない・・・

これは訓練の一部であり、立体映像であり、自分は絶対に安全であると言う事を

頭では理解していても、心が竦んでしまう・・・

ガサリツと近くの木々の揺れる音・・・心の中の自分はビクッとき上がる・・・しかし、体は違った・・・

音のした方向が情報として頭の中に滑り込んでくる・・・

その方向を向く・・・銃をガンベルトから引き抜いて魔力を操り、
弾丸を弾倉の中に精製する・・・そして、撃鉄を引き起こし、射撃
体勢に入る・・・

ガサガサツ・・・バーンツ・・・ドサリツ・・・

何か黒い影が飛び出してきたが、それが何かを確認する前に引き金
を引く・・・

しかし、頭の中にはその敵の情報がすぐさま浮かび上がっていた・・・
そして、何処が急所なのか・・・どうすれば一撃で仕留められるの
か・・・

そんな情報が浮かび上がった直後に体が勝手に動いていた・・・

発砲音・・・茂みの向こうで、何かが倒れる音・・・

アナウンス 「命中しました。」

敵に命中させた場合が「命中」、急所に命中させた場合が「的中」、
一撃で仕留めた場合が「必中」。

アナウンス 「訓練レベルを上昇させます、レベルは3です」

アナウンスが終る・・・と、ガサリガサリと草木が揺れる音が複数の方向から・・・

敵の居場所がまるで手に取る様に頭の中に浮かび、対処法も浮かぶ・・・

何も慌てる事とも無く空いている手の親指と小指で掌を扇ぐよつこコッキングし連續射撃を行う

体勢をとる・・・の動作をファニングと言つ。

ガサツ・・・バーンツ・・・ドサリツ・・・ガサツ・・・バーンツ・・・ドサリツ・・・ガサツ・・・バーンツ・・・ドサリツ・・・

飛び出してきた・・・敵を瞬間で排除する。

敵の急所と敵がどの様に飛び出してくるか、何処を狙えれば良いか・・・全てが頭の中に浮かび、

自分が何かを考える前に体が勝手に動いて、敵を排除していた・・・

名無し 「え・・・これが・・・俺?」

戸惑う間も無く、次のレベルの訓練が始まる。

第六話 正確無比

バーンツバーンツバーンツ・・・

連續での発砲音・・・画面に映る名無しは戦場慣れした動きをしている・・・

まるで獲物を狙う猛禽類の様に見られただけで切断させそつと目をしている・・・

クルシス 「すげえ・・・記録更新しそうだぞ・・・」

現在の訓練レベルは最高レベルの20である・・・

訓練レベル15あれば十分な実力と言われる。自分は訓練レベル18が限界であった・・・

大剣使いと銃師では感覚が違うかもしれないが・・・

それでもこのレベルに到達して殆どの的を命中させるのは凄い・・・
ここは射撃場の制御室である。入り口以外の方向に機械がびっしりと並んでいて、

複数のディスプレイに射撃場内部での訓練の様子がリアルタイムで表示されている。

スイレンは後ろでディスプレイの一つをジッと見つめている・・・

クルシス 「そろそろ訓練終了だな・・・そろそろ魔力切れになるかもだからな」

パネルを操作して訓練終了の合図を送りうつする・・・

アナウンス 「訓練は終了です。訓練は終了です。元のフィールドに戻します。

射撃戦績はランクEXです。命中率100%、的中率97.38%、命中率90.27%、

平均反応速度2.8秒、最速1.11秒です。」

アナウンスが終了し、訓練が終った・・・

クルシス 「ふう・・・すげえな、こここのギルドの誰よりも強いじゃねえか・・・」

こここのギルドでの銃師の最高記録は命中率100%、的中率34.73%、命中率13.02%である。

それを圧倒的に上回る戦績である・・・

クルシス 「この戦績なら・・・」

今の戦績と立ち回りを見れば相当な実力の持ち主なのはわかつた・・・

そして、これだけの実力なら、データバンクに記録が残っているかもしれない・・・

名無しは射撃場の中心部分に立ちすくしている・・・

クルシス 「ああー・・・しゃーねえ、行くか」

名無しを迎えて行く為に射撃場に向かう・・・

スイレン 「えと・・・はい」

その後をスイレンが追つてくる。

射撃場の中心で魔銃を握り締めて呆然と立ち竦む・・・

自分がこんなに強かつたなんて・・・

それ以前にどの敵に対しても瞬間的な対処法が思いつき、それを実行していた・・・

一瞬何かの悪い夢か何かでは無いかと疑うが・・・

それは紛れも無く現実であり・・・右手に握った銃の重みが現実だと知らしめてきた・・・

クルシス 「おーい、大丈夫かー？」

肩を叩かれ、ビクッとした後に、ようやくすぐ近くまで

クルシスとスイレンがやつてきていた事に気がついた。

クルシス 「何か思い出したか？」

「ちひを氣遣う様に声をかけてくる・・・

名無し 「いえ・・・スイマセン」

思い出した事は何も無い・・・わかつた事ならある・・・

多分・・・自分は戦闘を経験した事がある・・・

意識としては怯んでいても、体としては怯む所か何だが慣れ親しんだ場所に居る様であった・・・

自分が誰なのか・・・そこがとても気になる・・・

クルシス 「何故謝る?まあ、良いけどな、それよりお前凄いな

あの戦績だ、相当な実力者だぜ?データバンクに問い合わせれば

お前が何処の誰だかわかるかもしねえ」

名無し 「本当ですか!」

自分の事が判るかもしない・・・それを聞いて沈んでいた気持ちが浮き上がる・・・

クルシス 「スイレンと名無しが知り合いだつたなら、名無しに関して何かわかれば

スイレンに関しても何かわかるかもしねえ

ぞ。」

氣を利かしてスイレンにも声をかけるが肝心のスイレンは上の空で

ある・・・

スイレン 「・・・・・」

クルシス 「スイレン?スイレン、ビリした?」

スイレン 「え?ああ、何にも無いです」

一瞬だけ名無しの顔を見た後にすぐに何事も無かつたかの様に振舞う・・・

クルシス 「そうか・・・無理はするなよ、じゃデータバンクを調べに行こぜ」

名無し 「はい」

スイレン 「わかったわ」

握り締めていたF0g-10をガンベルトにしまおつとする・・・

手が硬直しており、引き剥がすのに少しだけ苦労した。

そして記録を管理する為の 大型コンピューターの管理室に向かう。

第七話 記録管理室

大型コンピューターの管理室は関係者以外立ち入り禁止らしい・・・

関係者と言つのはデータの管理を受け持つ支援関係の仕事についているギルド員の中の

資格を持つた者だけらしい・・・

その為、データバンクへの接続は直接は出来ず、管理者に頼んでバンクにアクセスしてもらい、

必要なデータを引き出してきて閲覧するだけらしい・・・

そして、その受付カウンターでクルシスと管理者の女性が揉めている・・・

クルシス 「こ」の戦績だぞ！無いなんて事があるわけねえぞ！」

ドンッとカウンターを両手で叩き、相手に唾を欠きかける勢いで怒鳴りつける。

女性 「無い物は無いです。」

相手の方は全く相手にせずに落ち着いた対応をしている・・・

クルシス 「この実力だぞ？今時個人で生き残るのは不可能だ、だ

からどこかのギルドに加入して
はすだ、だからデータバンクのどこかに残つてゐるは
ずだ！」

クルシスは引き下がるつもりは無いらしい・・・

女性 「・・・はあ・・・貴方はいつも強引ですね、そんなん
じゃモテませんよ？」

クルシス 「うぐつ・・・」

痛いところを突かれたのかクルシスは黙り込む・・・

スイレン 「すいません、本当に無いですか？本の小さな事でも良
いんです、何か合つたら・・・」

スイレンが必死になつて頬み込む。と、女性が少し困つた顔をした
後に溜息をついて口を開いた。

女性 「無い事はないのよね・・・」

クルシス 「あるじゃねえか！」

クルシスが先程のお返しとばかりに女性を丸め込もうとするが・・・

女性 「人の話は最後まで聞きなさい、だからいつまで経つて
も訓練所教官止まりなのよ」

クルシス 「うぐつ・・・」

また痛いところを突かれて黙り込んでしまった。

女性 「それでね、その情報っていうのが、本当にくだらないと言つかりえない記録だから・・・それに、そつとう古い物なのよ」

スイレン 「その情報をくださー！」

スイレンはそれでも情報を欲した・・・

女性 「だつたら、端末を貸してくれる？」

スイレン 「はー」

スイレンは自分のポーチの中から小型の通信端末の様な物を取り出して女性に渡した。

女性 「概要に關しては今説明するわね」

そう言つると女性がその情報 記録に關して説明を始めた。

まず射撃場の名無しの得点と煮たような記録に關して、これは五十三年前のこの都市に

ギルドが開設された直後辺りの記録。

得点は「命中率100%、的中率98・97%、命中率98・23%」であった。

そしてその記録を出したのが・・・リュウと書かれた少年であったらしい。

そのリュウに関しての個人情報の記録は残っていない。

ただ、記録の中の日記の部分にその名が登場していたらしい。

・記録重要度D 記録番号D1-83

日付：失暦 一二三一七年 一月 二八日 記録者：決戦唯一の生き残り

運命を決するはずの戦闘は終った。

俺一人を残して他のメンバーは全滅してしまった・・・

この都市は自律防衛システムによって消滅する事は無いだろ？・・・

しかし・・・この世界を蝕む根源を絶つ事は出来なくなってしまった・・・

私の役目は仲間達が今すぐ帰つても良い様にこの都市で帰りを待ち続けるだけである。

そして、リュウとルイの帰りを私は待つ必要がある。

リュウは約束をした「俺は必ず帰る」と・・・

だから、私はこの都市で仲間の そしてリュウとルイの帰りを待つ

これが記録の全てであるらしい・・・

この都市は五十三年前に大々的に起きた魔王と名乗る者の討伐作戦の重要な拠点であった・・・

その作戦は決行された・・・

元々、この都市の近く・・・と言つても相当遠いが、

そこに魔王を召喚する者が住まつ場所があつた・・・

まるでRPGゲームに登場する魔王城そのまんまの城が構えていた・・・

そこに、こここの都市に集まつた精銳達が突撃していったのである。

人数は合計で200人弱・・・武装は完璧。これで魔王を討伐できれば、

この荒廃の時代が終ると信じて突撃していった・・・

しかし、その部隊は一人を残して全滅・・・

その生き残りの一人が記した日記らしい・・・

その日記に「リュウ」と書かれていたと同様に同じ戦績を出した少年が居たらしい・・・

しかし、五十二年も前の話なので、名無しとは無関係である・・・

しかし、とても気になつた・・・そして、情報管理の女性に話を聞くと、

この日記を記した人はまだ生きていると言つ・・・

毎日、今は使われていなはずの第一ゲートで、仲間の帰りを待つ
ているらしい・・・

クルシスがその人物の所まで案内してくれるそうだ・・・

第八話 過去の記録

クルシスの案内でやつてきたのはゲート管理システムが破壊され、ゲートとしては二十年前から使われては居ない第一ゲート・・・。使用されているゲートなら、光線防壁レーザーウォールでゲートを閉じているが、今はもう使われていない為、強化合金による隔壁が降りている。その隔壁の前の所に杖をついて佇む老人が居る・・・老人は隔壁を見ていた。

そんな老人にクルシスが声をかけた。

クルシス 「おう、爺さん今日は帰つてきそうか？」

老人 「ふむ・・・いつか帰つてくるわい・・・何か用か？」

老人はこちらを見ずに、隔壁を見ながら答えた・・・

クルシス 「過去の射撃場での最高記録に関して少しな・・・」

老人 「最高記録？リュウの記録がどうした？」

どうやら老人はこちらを見る気が無いらしい・・・

クルシス 「いやあ・・・それと同じ記録を出す奴が居るんだが・・・」

老人 「何！？」

その時になつてやつと老人はクルシスたちの方を見た・・・

クルシス 「そいつが記憶喪失らしくてな、まさかとは思うが・・・

つて、話聞いてるか？」

老人 「リュウ・・・ルイ・・・」

その老人はクルシスの話なんか聞いていなかつた・・・

名無しとスイレンの方を見て驚いた顔をしていた。

クルシス 「んあ？」

名無し 「えつと・・・」

スイレン 「・・・？」

老人 「リュウにルイじゃないか、やつと帰つてきたのか・・・」

老人は名無しとスイレンを懐かしそうに眺めながらそんな事を言った・・・

名無し 「俺を知つてるんですか？」

老人 「知つてゐるも何も一緒に魔王討伐に参加した仲じやぞ・・・」

スイレン 「魔王討伐作戦は五十三年前でしょう?」

クルシス 「その前に爺はいつこいつらと出会つたんだよ」

老人 「五十三年前、魔王討伐作戦決行の一日前じゃ」

クルシス 「・・・そのときに出会つたリュウとルイって奴にこいつら一人がそつくりだと?」

老人 「そつくりも何も同一人物じやろ?」

クルシス 「こいつらは記憶喪失なんだよ・・・と言うか、こいつらが五十三年前のリュウとルイって奴と同一人物つてのはありえねえだろ?」

スイレン 「はあ・・・」

スイレンが思いつきり溜息をついた・・・

自分と関係のない話つぽいので落胆したのであるつ。

老人 「うむ・・・とりあえずリュウに渡したい物があるのじや」

老人はそう言つてバッグから何かそこそこ大きい物を取り出し差し出してきた・・・

名無し

「魔導銃……」

クルシス 「魔銃だな……見た事の無い形式だが……どこの設計だ？」

老人が取り出したのは簡素なつくりの魔導銃であった。

片手で取り扱う風には見えない感じの銃である。

銃身が長く、遠距離からの狙撃を行うのに適している形状をしている……

よく見ると光学標準器スコープが付属している。

老人 「おぬし……リュウが戦場に忘れていった銃じや」

名無し 「戦場？」

老人 「魔王城じや」

スイレン 「そこに行けば何かわかるかも……」

クルシス 「んあ……クエストで旧魔王城の簡単な奴あつたかなあ……無かつたら探索で……」

老人からその魔導銃を受け取つて、それを背中に背負つた。

名無し 「ありがとうございます」

老人 「お礼なぞいらぬわ、それよりクルシスよ、嫌な予感がするわい・・・」

「行くなら注意するのじやぞ」

クルシス 「ああ、わかつたぜ、じやあな」

老人 「ふむ・・・わしは少し寝るかのう・・・」

老人とはそこで別れた。

その後、クエストカウンターで手続きを済ませ、

クルシス、名無し、スイレン、ミラーズの4人で旧魔王城の探索に向かった。

第九話 旧魔王城

古き時代の中世の城を思わせるつくりの大きなレンガで出来た建築物・・・

今は使われる事も無く、大きな戦闘があつたのかとこりどいろに色々な痕がある・・・

その城は高い山の上に建っていた・・・

城の入り口側はなだらかな斜面が続いているが、

反対側は切り立つた崖であった・・・

崖の下のほうには、川が流れていた。

その旧魔王城は王座があるべき所は何か大きな爆発でもあつたのか、

崩れ去っていた・・・王座の後ろの壁は消し飛ばされていて、

その王墓のすぐ後ろの六からは切り立つた崖が確認できた・・・

戦場であつた事を思わせるような爆発痕等が数箇所残つていたが、

五十年もの時を経て、殆どの物は腐敗なり劣化なりして確認できなかつた・・・

その城の入り口の大広間を見たときに一瞬だけフラッシュバックが

見えた・・・

燃え盛る炎の中・・・押し寄せる魔物の群れ・・・そこに切り込む肩を並べた仲間達・・・

後ろから戦車が続き・・・戦車の砲口から電撃光線スタンレーが発射され・・・

敵陣の中央部分の大多数の魔物が消し飛ぶ・・・

横に居た二十代後半の青年がこちらに何かを叫ぶ・・・

そして、自分は敵陣に出来た穴から奥に進む・・・その後を少女がついて来る

そんなフラッシュバックだつた・・・その光景の中で見覚えのある物が目の前に佇んでいた・・・

砲口を天に向け・・・地面に車体がめり込んだ戦車である・・・

旧魔王城に来るのに受けたクエストは「哨戒」であった・・・

近頃、ここに辺りで中型～大型の魔物の目撃情報が多数寄せられた為、

旧魔王城の辺りを哨戒して、中型の魔物が居るのであれば討伐。

大型の魔物が確認されたのであれば正式な依頼として数十人でチー

ムを組んで討伐すると並んで、

前調査為にやつてきたのである。

クエスト人数は最高6名だった。

予定通りに名無し、スイレン、クルシス、ミラーズの4人で調査に向かった。

旧魔王城につくまでは特に魔物と出会つ事も無く、問題は何も起きた。

旧魔王城についても特に小型の魔物とも出会つ事も無かつた為、

記憶の手がかりになりそうな物を手分けして探しているのである。

そこで、名無しは入り口の大地に頓挫する軽戦車を見つけたのである・・・

名無し 「・・・スタン・・・レイ・・・・」

スイレン 「どうしたの?」

その戦車に手を当てて考え事をしていたら、スイレンに声をかけられた・・・

名無し 「いや・・・何か思い出せるかと思つたんだが・・・

一瞬だけ何か見えた気がしたが・・・

良くわからなかつた・・・」

スイレン 「・・・」

スイレンはそのままアーヴィングが居る方へと行つた・・・

クルシス 「つむ・・・」これは軽戦車だな・・・型番は知らんが・・・」

と、今度はクルシスが名無しの元にやつってきた。

クルシス 「何か思い出せやつか?」

名無し 「ここには来た事があると思つんですが・・・なんだか、じう・・・露がかかるつてる感じで・・・」

クルシス 「ここに来た事がある?・・・倒れてた河原は確か崖下の川の下流だよな?」

名無し 「そうなんですか?」

クルシス 「ああ・・・お前は記憶喪失だつたな・・・確かお前が倒れてた河原の上流がここに

当たると思つたが・・・何か関係あるのか?」

名無し 「まあ・・・わからないですね」

クルシス 「そつか・・・」

そつぱうとクルシスは沈黙し何かを思案し始めた・・・

名無しは名無しで自分の考えをまとめてみる事にした・・・

多分だが、自分はここに来た・・・あの老人が会つたと言つのは自分だ・・・

そして、ここで大きな戦いがあつた・・・その戦いに自分と・・・スイレンも加わつたのだろう。

そして、その戦いの最中・・・自分は・・・魔法に巻き込まれ時を越えた・・・のではないだろうか？

時空転移や時間転移の魔法は未だ開発されていないのでわからないが、

何らかの転移魔法の失敗によつて自分は五十三年の時を越えたのは?といつのが

現段階での名無しの考え方だ。

とはいゝ、転移魔法の失敗によつて時を越えると言つのは考えにくい・・・

転移魔法が失敗したのであれば、次元の裂け目の中を永遠と漂つているはずである・・・

考えて・・・考えて・・・思索を続けるが、特に思い出す事も無く・

奥に進んで王座についても、特に何も思い出せなかつた・・・

落胆しながら王座のある大きな部屋に入る・・・

クルシス 「ん・・・・何か音がしなかつたか?」

クルシスが何かに気がついたように辺りを見回す・・・

第十話 接敵

クルシスの一言で皆がそれぞれの獲物を掴み警戒態勢に入る、
クルシスは大剣を、名無しはリボルバーを、スイレンは長杖を、
ミラーズは短剣をそれぞれ手に取り構える。

前衛はクルシス、ミラーズの二名、後衛が名無しとスイレンである。

クルシス 「誰か居るな」

ミラーズ 「だね、そこの王座の後ろ、誰？」

王座のある大きな部屋、王座の後ろの壁はじつそりと消失している。
その王座の入り口から死角になつてている場所から誰かが現れる・・・

「あはは〜・・・見つかっちゃったねえ・・・流石
この時代最強の剣士さんだなあ〜」

現れたのは女の子であつた・・・ワンピースを着たさりさりの黒髪
の10歳程の女の子・・・

まるでかくれんぼをしていて見つかったみたいな雰囲気であるが・・・

こんな所に一人で居る女の子・・・あからさまに怪しい・・・

いくらいに辺りの魔物が討伐されて減つていいとはいえ、

女の子一人で居るのは危険極まりない・・・イコールここに居るこの女の子は人間ではない・・・

魔物の中には完全に人間に擬態する物も居る・・・

大概、地下都市の外に居る武装していない人間は魔物の擬態である。

クルシス 「誰だお前・・・」

女の子 「ふうん・・・偉そうな剣士さんだなあ・・・まあ、いいけどねえ・・・」

貴方に用は無いの一だから黙つてくれるかな

「？」

その女の子は笑みを浮かべながら話しかけてくるが、目が笑っていない・・・

所属ギルドを言つのが普通・・・らしい

質問に対しても答えない・・・対外の場合には住まう都市名と自分の名、

だが、女の子はその質問を無視している・・・

女の子 「私はお兄ちゃんを迎えて来ただけだからねえ！」

その女の手と眼が合ひ……

名無し 「兄……？誰だお前……」

クルシス 「お前の知り合いか？」

クルシスが名無しに聞こえてくるが、生憎と記憶喪失中なので覚えて
いる訳がない。

女の子 「あるえ？ああ～そつか～今回のお兄ちゃんはまだ
私の事しらないよね～」
自己紹介からー？面倒くさいなあーもひ二十回
田だよー？」

一人で何かを納得したように両手を打ち合わせてから、一〇一二〇笑
顔で語りかけてくる……

女の子 「私はあー……あー」

と、女の子が右手を右側に突き出す……そのまま肘の辺りまで
次元の裂け目に飲まれている……

女の子 「やつぱ自己紹介やめー、今回のお兄ちゃんが私の
言つ事聞いてくれなかつたら

結局消しちゃうんだしー、言つ事を聞いてくれ
るお兄ちゃんに自己紹介した方が

楽だよねー？何でこんな簡単な事に気が付かつ
たんだるー？」

その女の子が右手を次元の裂け田から引き抜く その手には機関銃が

咄嗟にリボルバーを女の子に向け

ガギッ ガンツガラランツ・・・

手に持っていたはずのリボルバーは後ろの床に落ちる・・・

女の子 「流石お兄ちゃんだなあ、油断できなによ〜」

そつ良いながら女の子はいつの間にか左手に持っていた拳銃で名無しのリボルバーを打ち抜いたのであつた・・・

女の子 「やあー、話し合ひの時間だよー?はい、武器を床に置いてねー

変な動きをしたら次は頭を消し飛ばしちゃうからねー?」

片手で扱える風には見えない重厚な機関銃を片手で操りこじらりに向け・・・

まるで見た目相応の幼さを残した楽しげな声で忠告をしてきた・・・

ミハーツ 「話し合ひ?武器を突きつけて話し合ひだなんてねえ・・・それは脅迫って言うのよ?」

ミハーツが短剣をゆっくりと地面におきながら女の子をにらみつけ

る・・・

スイレンも足元に長杖を置く・・・ クルシスが大剣を床に置く・・・

女の子 「はあーい、良い子良い子～じゃー、お兄ちゃんは
一緒に帰つてくれるー？」

次元の裂け目・・・ 数多くの道具等を持ち歩きたい時等に道具を保管しておくるための魔法・・・

ディメンションゲート
次元倉庫は人間のみが使う事が出来るようになつていて魔力だ・・・

イコール魔物ではない・・・ だが、人間でもないだろう・・・ ジャ
あ何なのだろう?

名無し 「帰る? 何処に?」

この場は落ち着いて相手から情報を聞き出るのが先決だ・・・

相手を刺激しないように質問をしてみる・・・

クルシスとミラーズは名無しの意図を悟つてくれたようで、黙つて
いる・・・

スイレン 「名無しを知つてているの! ねえ、教えて、私の事は
知らない?」

スイレンは焦つていてるのか怒鳴りつけるように相手に質問をする・・・

女の子

「はあー・・・質問は受け付けないんだけどー?」

明らかに不機嫌になつてゐる、これは不味い。

第十一話 不意打ち

貴重な情報を求めて、スイレンは相手の様子を伺う事もせずに叫びかける。

スイレン 「お願いっ、私について知ってる事を教えて…」

向けられた銃口を意識しながらも横に居るスイレンを落ち着かせるために声をかけようとするが、

その前に女の子がスイレンの足元に向かって威嚇射撃を行っていた、

スイレン 「・・・・つ…！」

女の子 「黙れって言つてるのわからないかな？次は頭いくよ？」

その不機嫌な声色から次は無いと想つのが感じ取れる…

スイレンは余りの出来事に驚いて硬直してしまった。

女の子 「んー…帰るつて言つたらお母様の所に決まつてるじゃん？」

先程の不機嫌な声色が完全に消えていた…まるで別人である。

今のは名無しの質問への回答だら…・・・お母様？

名無し

「お母様？母さん？俺の母さん！？」

女の子 「あれれ？反応がおかしいなー・・・今回のお兄ちゃんは何か変だよー？」

女の子は不思議そうにこちらを見る。

女の子 「あー、記憶喪失のばたあーんかあーーのばたあーんが一番面倒くさいなあー」

名無し 「パターン？何の話だ？」

女の子は左手に持っていた拳銃を弄びながらこちらを見て溜息をついた。

女の子 「じゃー説明するねえー」

まるで昔話を語るような調子で、淡々と語つていく内容は意味のわからないものだった。

貴方は大罪を犯しました。それはとても重い罪でした。産みの親である母親を裏切る大罪でした。

お母様は大いにお怒りになりました。それと同時にお母様は大切に育てた子供に裏切られ、

心に大きな傷を負つてしましました。そして貴方は家を飛び出していました。

お母様は貴方がいつまで経つても戻つてこないので、心配になつて兄弟に貴方を探させました。

私は貴方を探している兄弟の内の一人です。

淡々と語る女の子は語り終えた後にこちらを見る。

女の子 「判つて貰えましたか？」

その瞳はまるでガラス玉のように無機質でこちらを威圧してきていた。

名無し 「俺が犯した大罪とは？」

女の子 「それは、貴方が人間を愛してしまつた事です。」

名無し 「人間を愛する？」

女の子 「そう、人間を愛してしまつた、そして人間を庇おうとしたのです」

名無し 「意味がわからな」ぞ…」

女の子の口から発せられる言葉はまるで機械から発せられる無機質な音のようだった。

女の子 「私の説明で理解していただけないのですね？」

すると女の子の瞳の色が変わった・・・無機質なガラス玉の瞳から

女の子らしい生き生きした瞳になる

女の子 「もう今回は最初から諦めちゃおう、どうせ次の世界に行けばお兄ちゃんなんて居る訳だしさー、よし、そつと決まつたらこのお兄ちゃんの排除かなー」

いきなり女の子は卑口でやう言つと可愛らしい笑顔を浮かべ 二
ちらを見る

女の子 「これで何度もかな? お兄ちゃんを排除するのは」

そう言うと機関銃の引き金を引かんと ガツキーンッ

ミラーズ 「何か知らないけど、貴方を捕獲するわね」

女の子 「・・・・・」

ミラーズがバックから別の短剣を取り出し、高速で投げつけ、銃口を逸らした。

その隙にクルシスが大剣を拾つて女の子に接近を試みる。

名無しもその隙にリボルバーを回収、スイレンが長杖を掴み、魔法の詠唱に入る。

ミラーズは最初に床に置いた短剣を回収し投擲した短剣を回収に向かう。

その間に女の子が機関銃をクルシスに向けて発砲。

クルシスが大剣を盾のよつに使い機関銃の攻撃を防ぐ。

その間にリボルバーに装填されていた弾丸の種類を高速で変える。

スタンバレッダ
電撃弾のレベル一である。相手を痺れさせる程度の威力の弾丸。殺傷能力は無い。

その弾丸に装填しなおした時にはミラーズが投擲した短剣を回収し、両手に短剣を持って

女の子に攻撃を仕掛けていた。と、視界の端っこにクルシスがいた。ドゴッと言づ音・・・

横に立つていたはずのスイレンの姿が消えていて、

女の子に切りかかっていたはずのミラーズも消えていた・・・

背後の壁に何かがぶつかる音が響いた・・・

スイレンが居た場所には詠唱中の魔方陣だけが不自然にその場に魔法の痕跡を残していた・・・

女の子 「貴方達じや私に勝てないよ?」

先程の反撃が一転、またしても追い詰められてしまった、

女の子は余裕そうな顔でこちらを見ている、

先程の一手、ミラーズの攻撃は完全に不意打ちのはずだったのに、

完璧に対処してきた。

クルシスを空氣砲ヒル-シヨウトで吹き飛ばし、ミラー^ズを蹴り飛ばしてスイレンにぶち当てる。

普通の人間が出来る事ではない・・・

奇襲を全て回避され、銃口を向けられる。

こちらが何らかの行動を起こす前に確実にその銃が火を噴いて自分の体を粉々に消し飛ばすのが情報として具体的な数値と共に頭の中に表示された。

「お兄ちゃん程の性能を持つてればわかるよね？勝てないのは」

無邪気な笑顔と人間なんぞ一瞬で肉塊に変えてしまう凶悪な銃口を
向けられ

硬直してしまう・・・クルシスもミラーズもスイレンも誰も援護に入れない・・・

頭の中にはありとあらゆるパターンの抵抗方法が示され……

瞬間で背負っていた長銃を取り、自分の足元に向ける、その行動を見逃さずに女の子は引き金を引く。

ギュイイイインッ・・・まるでチェーンソーの様な銃声・・・その銃声に混じつて甲高い銃声・・・

長銃から射出された弾丸は空気砲のレベル4、人間の体を簡単に吹

き飛ばす程の

魔法的風を引き起^ハす弾丸である。

それの効果が瞬間で発動し、自分の体が風によつて吹き飛ばされた。
・

一瞬前まで名無しが立つていた場所に数十発の弾丸がめり込む。

背後の壁に上手く両足で着地して、衝撃を完璧に消して、地面に音も無く着地する。

長銃に装填された弾丸を変化させる。

エアーショット
空気砲のディープマジック
レバ4から吸魔弾に変化、

女の子が銃口を立ち上がろうとしていたクルシスに向けた

この動きは完璧に計算できていた、吸魔弾をクルシスの前の地面に

向かつて撃ち出す、魔法を無力化する防壁がクルシスを囲むように作り出される。

そこに女の子の放つた弾丸が何発も当たるが、

吸魔力場によつて魔力を吸収され、弾丸は虚空へと消えていく、

女の子は舌打ちをすると、今度はリバースとスイレンの方向に銃口を向ける

その動きも計算の中に完璧に入っている、リボルバーを引き抜いて、

長銃を片手でミラーーズとスイレンの届く方向に向け、

リボルバーを、女の子の持つ機関銃へ向け、両方の引き金を同時に引く。

女の子 「つ！？」

長銃に装填されていたのは勿論、吸魔弾ディープマジックであり、魔弾を消滅させる。

リボルバーに装填されていたのは電撃弾スタンバレットの「▽1、相手を痺れさせる程度の効力しか持たない弾丸、その弾丸は見事に機関銃にヒット。

女の子自身を狙っていた場合、確実に回避されていたのだろう。

そこで、明らかに鋼鉄製の機関銃を狙つて、感電させたのである。女の子がビクンッと一瞬だけ体が反応した後に、その場にドサリッと倒れこむ、

その拍子に機関銃がガラランッと音を立てて転がった。

女の子 「あはは・・・今回のお兄ちゃんには負けちゃったか・・・まあ、良いけどね・・・

忘れたら駄目だよ“私達は貴方を消す”それがお母様の望みであるならね

女の子がそう言つと、辺りの風向きが変わる。

女の子 「最後に一言。過去を変えると未来が変わる。未来を変えても過去は変わらないけどね」

最後に目を開けていられないほど強風が吹き荒れる

目を開けた時にはその女の子と機関銃はきえていた。

クルシス 「うう・・・なんだつたんだ・・・」

クルシスが大剣を杖のよつに使ってこちらに歩いてくる。

スイレン 「いたたた・・・」

ミラーズ 「あの子は新種の魔物かしりへとりあえずギルドに報告しておかなきやね」

スイレンとミラーズも少し遅れてやってくる。

クルシス 「人間の言葉を話せる、理解できるといつ辺りから最上位の魔物ではないか？」

最上位ともなれば魔法や魔銃を使えてもなんら不思議はない、

まあ、こんな所で話しかけよりは都市に戻らうぜ。

」

ミラーズ 「賛成ね、名無しにも話を聞きたいし」

ミラーズとクルシス、スイレンの二名が名無しを見る。

名無し 「えつと？」

ミラーズ 「あれよ、あの戦闘慣れした戦い方、というか完璧に先読みしてたとしか思えない

戦い方よ、アレはどう考えても一般市民じゃないつて事はわかるわ、

その上、あの女の子が言つには“人間を愛した罪”とやらに關してもね

色々と判らない事まみれなのよ、そこいら辺に關して何か思い出した事、

どんな些細な事でも良いから都市についたら話なさい。」

名無し 「はい」

と、その時にドローンッと何かが崩れる音。

ミラーズ 「え？」

スイレン 「あそこ、城の裏手」

スイレンが指差す先には城の裏手の崖の下に広がる広大な森があつた。

そこの一角に砂煙が立ち上がっている所がある。

第十二話 単独行動

砂煙が立ち上がる場所を確認するが、やはり人間の肉眼での確認は不可能である。

クルシスが手を筒の様にして、その筒を覗き込むようにして、

砂煙が立ち上がる場所を見る。

手に魔力が宿っているので、多分遠見の魔法を使っている。

遠距離を確認するのに使われる初步的魔法である。

クルシス 「良く見えんぞ、何か大きな魔物が居るな」

ミラーズ 「魔物?」

必死で砂煙の上がる場所を見るが、

必死に目を凝らしても、確認できるのは砂煙が上がっているだけである。

と、体が勝手に動き、魔力を目に集め始める。そして、口が勝手に言葉をつむぐ。

名無し 「魔物名称、スラッシュ・スパイダー切裂蜘蛛

状況、15～16歳程のフル・クフーデ蝙蝠獸人の少年と10～11歳程のフル・クフーデ蝙蝠獸人の少女が

スラッシュ・スパイダーに襲われている。少年の武

装は短剣

少女の武装は

クルシス 「おい、お前……」

と、その台詞を半ば強引にクルシスが止める……

その場に居る全員が名無しに注目している。

名無し 「あれ……？」

しかし、名無し自身も今の自分の行動にびっくりしていた。

今のは、視野距離を魔力で強化して、あの戦場を確認し、

戦場の状況把握と情報伝達を高速で行ったのである……

名無し 「少年と少女の救出、魔物の討伐をする
脚力強化、直線距離1500メートル
到着までの時間55秒、突撃する。」

いきなりだ……まるで自分の体が勝手に動いている感覚……

足に魔力を溜める。脚力の強化が完了し、リボルバーを手に持ち、

王座の後ろに空いた大穴に向かつて走り出す……

クルシス 「おい！何してや！」

ミリーズ 「ちよつー待ちなさい！」

スイレン 「うー！」

クルシス、ミラーズ、スイレンの三名は、名無しの急な行動にびっくりしていた、

その声を振り払うよつこ、大穴から外に飛び出す

飛び出した先は足場の無い崖

体は重力にしたがつて落ちていく・・・浮遊感・・・

後ろからクルシスとミラーズが何かを叫んでいるのが聞こえたが、体は言う事を聞かない・・・

体が勝手に動く・・・地面がどんどん近づいてくる・・・

右手に握っているリボルバーに装填された弾丸を変化・・・

瞬間で空気砲エアーショットレバ4に変化・・・

地面にぶつかる・・・いや、地面ではない、大きな川である・・・

そこにぶつかる寸前に右手に握ったリボルバーを地面に向け、発砲。

エアーショットの効力で空気が破裂する・・・そこへ、自分の体が落ちる・・・

そのヒアーショットの効力で、着地の衝撃は完全に消滅する。

音もなく地面に着地し、そして瞬間で砂煙の立ち上がる森の一角へ走り出す・・・

森の中を疾走して、55秒足らずで目的地に到着。

目的地は森の一角の土煙が上かっている場所、

才々かなき僕され
また振重が起る
そして一燃が上かる

その先に少年と少女の姿がある。

少女の手を掴み必死で走って逃げている

その後を体長20ミリトル程の大蜘蛛が追いかけている。

大蜘蛛が一步を踏み出すたびに地面が振動し、木々がなき倒される。

大蜘蛛の歩みはあまり速いわけでもない、しかし人間の足で必死に走つても

一步一歩の進歩の違いにひいて差は広がるが逆に縮まつてしまつ。

蝙蝠獣人 フルーフーフーデ 特有の翼を使って逃げれば良いものを、必死に走って逃げているせいで

フルーツフルーテ

もつすぐ追いつかれそうだ、手に持つリボルバーの弾薬を変化させる。

ファイアバレット
火炎弾のLVSに、威力は最高値、鉄をも溶かす灼熱の爆炎を放つ
弾丸。

背負つている長銃の弾丸を完全被覆鋼弾にする。

大蜘蛛は少年と少女に気を取られ、こちらに気がついた様子はない。

銃口を大蜘蛛の頭に向け、引き金を引く。勿論急所を狙い、
動く大蜘蛛の動きも完璧に予測した上で射撃なので外れる訳がない。

その発砲音が辺りに響き渡る前に弾丸は蜘蛛の頭に吸い込まれ、

爆炎を上げる・・・爆発の衝撃が少年と少女をこけさせる。

急いで少年と少女のもとに近付こうとする

と、そこで頭を炎上させている大蜘蛛の背中がミシリと音を立てて
裂け始めた・・・

名無し 「目標は雌個体であると判明、固体状態から子を宿した物と判明」

口から、その敵の情報を漏らしつつも、倒れて気絶している少年と少女のもとに向かう。

名無し 「大丈夫か？」

少年 「う・・・う・・・」

少年の方はうつすらと呻き声を上げるが、どうやら立ち上がりそう
にない様だ・・・

少女は少し離れた場所に倒れている。

第十四話 切裂蜘蛛

少女の方の容態を見る為に近付く

と、その少女がいきなり立ち上がり、一呼吸で突っ込んできた、

咄嗟にリボルバーを引き抜き、引き金を引く

銃弾は少女に当たらず、少女は全体重を乗せ、名無しにタックルを
しかけてきた。

名無し 「うぐう

少女に押し倒され、上に跨られる。

と、気がつけば少女は名無しが背負っていたはずの長銃を名無しに
向けていた。

少女 「動かないで」

名無し 「まで、俺は

咄嗟に弁解をしようと口を開くが、銃口を首に押し当てられ、黙る
しかない。

少女はゆっくりと名無しに銃口を向けながら少年に近付いていく。

少女 「大丈夫ですか」

こちらを油断無く睨み付けながら、少年に声をかける。

少年 「うう・・・ああ、大丈夫だ」

少年もゆっくりと立ち上がる、この状態ではできる事はない様なので

その一人を観察してみる事にした、

少年の方はくすんだ銀髪の野性味のあふれる感じの名無じと同い年かちょっと上の少年である。

とそこで気がつく、少年の蝙蝠獣人フルーフフーフ特有の翼膜の張られた翼はボロボロになっていた。

先程の爆炎に焼かれた訳でも、先ほどの衝撃で破れた訳でもない、どうやら、もとから使えるような状態ではないらしい。

少女の方も少年と同じくすんだ銀髪をしているが、整っている顔立ちから

美少女と呼んでも差し支えない10~11歳程の少女である。

少年はこちらをにらみつけ、傍らに落ちている名無じのリボルバーを見つけ、それを回収した。

少年 「何だお前、俺達に何のようだ」

少年は左手に短剣を持ち、右手でリボルバーを向けてきた。

名無し 「質問は別に良いが、出来れば銃を返してくれ」

とりあえず、刺激しない様に銃の返却を求めてみる。

少年 「質問に答えてくれ」

少年は一いちらを睨み付けてくるが、敵意を向けられてはいないうだ。

名無し 「魔物から助けた、これでは駄目か?」

少年と少女は一瞬啞然とした表情をした後に疑うような視線を一いちらに向けてきた。

少年 「本当か?」

名無し 「本當だ、それよりも早く銃を返してくれ」

流石に時間がやばくなってきたので、少年を急かす。

少年は悩んでいる様だ、時間がやばい、少々手荒な真似をしないと命に関わる。

一瞬でその場で立ち上がり、瞬間で少年に近付いて、その手から銃を奪い取る。

少年 「なつー?」

少女 「つー!」

少年も少女も突如の出来事に反応できなかつたらしい。

奪い取つたりボルバーの中の弾丸を確認する。

装填されているのは先程の火炎弾のファイアバレットファイアバレット L-5であつた。

咄嗟に銃口を向け発砲する

と少女がこちらに銃口を向けなおし、引き金を引くとする

その銃身を掴み、銃口の先を別の方向に向ける。

名無し 「撃てっ！」

強引に銃口の向きを変えたせいで、銃を掴んでいた少女の体も強引に向きを変えられる。

バーンツと大きな銃声・・・こちらに近付いていた黒い影がビクリツと震えた後に

ゆっくりと地面に倒れる。

少女 「なつ・・・

少年 「何・・・」

名無しの放つた弾丸はちゃんと目標に命中し、爆炎を上げ、敵の大多数を吹き飛ばしていた。

そこで少年と少女は初めて自分達がどういう状況にあるのかを悟つた様だ。

名無しと少年と少女の三名は自分達を中心に半径10メートル程の

シールドウォール
防壁と言つ魔法によつて守られてゐる空間の中に居るといつ事。

そして、その防壁の向こう側には数多くの子蜘蛛が居た。

防壁に攻撃を仕掛けっていた一部の子蜘蛛が爆炎に撒かれていた。

そして、先程少女が撃つたのはシールドを突破して接近していた子蜘蛛であった。

名無し　　「状況が判つたなら協力頼む、後2分しか防壁がもたない

　　その長銃は貸す、少しでも敵を倒してくれ」

有無を言わぬ態度で少年と少女に指示を出す。

先程の銃の持ち方から、少年は完全な素人、少女はそこそこ使える
　　とこつ程度である。

二人とも、短剣を所持しているが、短剣の持ち方から、

短剣の取り扱い方は少年は魔物と戦える程度、少女は人並みという
　　ぐらいである。

ここは、少年に少女の護衛を、少女に銃による援護射撃をさせて、

自分が最前線に出て敵を引き付けつつ敵を一部排除後、この地域から撤退し、スイレン達と合流する・・・と、計算を終了する。

名無し 「お前は短剣で」この援護、お前は護衛されつつその長銃で援護射撃をしる」

少女 「了解」

少年 「わ・・・判った」

この状況で名無しの言つ事を聞く以外に良い案が思いつかないのか、

戸惑いつつも返事を返していく。

敵の数を数えつつ、溜息一つ。

第十五話 重症、死亡

バーンツバーンツとリボルバーの銃声、その銃声のすぐ後に着弾後の火炎弾が

小規模爆発を起こす音と、蜘蛛の足を刻む短剣の音と、

パンツパンツと定期的に聞こえる 援護射撃の音。

敵は確実に頭数を減らしている。

蜘蛛は本能に従っているのか、少女を真っ先に狙おうとするのだが、

それを少年が短剣を使って切り刻んだりして少女を守っている。

少女は少年が討ち漏らした蜘蛛を片つ端から狙撃している。

名無しはそこから少し離れた場所で複数の蜘蛛を相手にして戦つて
いる。

自分の足元に撃ち込む弾丸は空氣砲、体を吹き飛ばして敵との距離
をとる、

とはいどの方向に距離をとるにも敵に囲まれている為、必然的に

回避先は空中となる、そこから敵に対しても火炎弾を連続発射し、

小規模爆破、炎上を繰り返している。

重力に引かれて自らの体が地面に落ち始める。

その瞬間にリボルバーに装填された弾丸を変化させ、火炎弾から

エアーショット
空気砲にし、着地の準備をす

名無し 「あれ？」

とそこで不意に違和感を覚える、というより今までの一連の動作に違和感を覚えた。

自分はチームから無断で離れ、少年と少女を助けようとしている、チームメンバーと一緒に行つたら間に合わなかつたかも知れないが、

自分一人で飛び出してきた時は緊張していたはずだ、

それなのに今の自分は的確に戦場の状況を把握して、

少年と少女の戦闘能力を測つて的確な指示を出して、

自分自身は敵に臆する事もなく平然と戦つてゐる今の現状に違和感を覚えたのだ。

流石にこれはおかしい・・・と、少しだ

少しだけ戦闘に対する集中が解けた

パンツ・・・ブスリツ・・・

少女 「うぐうつ・・・」

少年 「スミレ!」

と少女の苦しげな声と少年の焦った声が聞こえた・・・

咄嗟に少年と少女の居る場所を確認すると、少女が蜘蛛によつて攻撃されていた。

少女の腹の辺り・・・そこに蜘蛛の鋭く尖つた鎌の様な前足が突き刺さり貫通していた・・・

突き刺している側の蜘蛛は既に力尽きていたのかゆつくりと音を立てて倒れる、

その時に少女に突き刺さっていた前足がズブリツと音を立てぬけた。

少女は左腕で穴の開いた腹の辺りを押さえ、右手で硝煙の立ち上がる長銃を握っていた。

少女 「いふつ・・・けはあつ・・・」

体をくの字に折り曲げ、口から血と胃液と何かの混じつたものを吐か、

そのまま地面に倒れた・・・最後まで銃を握り締めていて、その銃

で近付こうとしている

蜘蛛に狙いをつけようとしていた・・・

少年が必死になって少女の元に近付こうとするが、他の蜘蛛がそれを妨害している。

名無し 「しまつー？」

咄嗟にエアーショットの着弾地点を少しずらし、自分の体が真上でなく、

少年と少女の居る方面に吹き飛ぶように計算して射撃。

予測通り自らの体は少し離れていた少女の付近に吹き飛ばされる。

リボルバーの中の弾丸を変化させ、^{ファイアバレット}火炎弾にして、

周りから少女を狙い近付こうとしていた蜘蛛を片つ端から焼き払う。

それをしつつ、傍らに倒れている少女の状態を確認する・・・

状態は簡単に言つと間に合わない・・・

専門的な道具や治癒能力に特化した医者などが居れば余裕なレベルだが

生憎と名無しは治癒能力に特化した医者ではないらしい・・・

頭の中に浮かぶのは簡易な応急処置ばかり・・・

それに医者であつたとしても今この場で出来る訳がない。あたりにはまだ相当数の敵が居る。

敵を全て撃破する前に、この少女は力尽くるか間に合わない状態になるだろう・・・

辺りの敵を倒しながらそんな事を考える・・・助けるつもりが・・・助けられなくなってしまった・・・

そんな風にまた考え方をしてしまった瞬間に、

ジヤーアキンッと、背筋を凍らせるような、鳥肌が立つ様な不快音が響く、

音の方向を咄嗟に向く。

そこには少年がこちらに背を向けて立っていた。

少年の前には血塗れの大鎌を振り切つた体勢で力尽きている蜘蛛が居た。

大型犬程の大きさの蜘蛛が倒れる。そして、その少年の頭が

ズルリッと音を立ててズレしていく

名無し 「つ！？」

ボトリツと少年の頭が地面に落ちて転がり、その目がこちらを見た。

その瞳は何も映していないなかつた・・・

そして一瞬遅れて少年の残つた体から血が一瞬だけ噴水の様に吹き上がつた。

だが、その勢いも一瞬で消え、体が倒れる。

その間に、他の蜘蛛はこちらに対して攻撃してこなかつた。

死した少年の体を貪るうとすべての蜘蛛がその骸へと群がつていく。

第十六話 本氣、合流

骸に群がる蜘蛛を一瞬だけ呆然と眺めたが、すぐにリボルバーを握り締め、

骸に有りつけず、じかに狙おつとしていた蜘蛛を撃つ・・・

ブショウッと蜘蛛の頭に穴が空き、一瞬だけ内側からボグツと膨張し、次の瞬間には中身を撒き散らして破裂する。

リボルバーでは連射性能が無い為このままいくと手数が足りない。敵を捌き切れない、だからといって抵抗をやめれば一瞬で刻まれてしまうだろう。

グチャツバギツと言う肉と骨を引き裂く音を出来る限り無視して、少女を庇う様に立ち回る。

あれから何時間経つただろうか？

もう2時間近く戦い続けている気がする、実際はほんの数分の出来事だと思つ。

辺りは蜘蛛の肉片のじびりつく甲殻と蜘蛛の手足、その他色々な物が散らばっている。

悪臭が酷い、これが切裂蜘蛛ではなく

スラッシュスパイダー

猛毒蜘蛛だつたら、切り刻んだ蜘蛛の死骸から放たれる、

ボインズンスパイダー

猛毒を含んだ体液にも注意しないといけないが、今は関係無い。

飛び散つた肉片や蜘蛛の体液で足元がドロドロになつて体勢がいつ体勢を崩してもおかしくない状態である。

蜘蛛は一気に数百から数千の子を産む。

目算で大体200匹は息の根を止めたが、辺りを埋め尽くすような数の蜘蛛は一向に減らない、

しかし、名無しの体力と魔力は見るからに減つていつている。

このままでは体力が尽きて行動不能になるか、魔力が尽きて攻撃不能になるかのどちらかである。

と、ここでスイレンの声が聞こえた、幻聴かとも思った。

スイレン 「サウザンドナイフ 千本短剣」

ヒュンッヒュンッヒュンッ・・・ブスッブスッブスッと何かが飛翔する音と突き刺さる音が、

蜘蛛の波の向こう側から聞こえ始める。そこにクルシスの声も聞こえた。

クルシス 「^{スラッシュ}^{ショウ}^{ウイング}」
「切裂風」

ズバババババーと名無しの丁度背を向けている方向に居た蜘蛛が、

魔法によつて引き起^ハこされたカマイタチで切り刻まれる。

クルシスは自分に^{ハラッ}^シ^ウ^{イング}切裂風を纏わせて突撃している。

蜘蛛の波が途切れた事によつて向こう側が確認できた。

スイレンは長杖を地面に突き立てて魔方陣に囮まれて何かを呑いている。

周りには数百の在り来たりな短剣が高速で回転しながら漂つている。

時々、そのナイフが近付いてきた蜘蛛に高速で飛び、突き刺さる。

ミラーズ 「ああもう、勝手に単独突入は禁止つーつて、その子怪我してんじゃない」

氣が付けばミラーズが名無しの背後に立つていた。

少し名無しに注意した後にミラーズはすぐに倒れている少女の治癒にあたる。

クルシス 「あらかた片付けたぞー···疲れるなあ···

片手で大剣を持ち、周辺を警戒しながらクルシスが近付いてくる。

スイレン 「はう・・・」

スイレンが周りに短剣を浮遊させたまま近付いてきた。

ミラーズ 「治癒は完了・・・じきに目を覚ますわ」

ミラーズが少女の治癒を終えて立ち上がる。

クルシス 「さてと・・・面倒事に巻き込まれた訳だが・・・
報告にあつた巨大な魔物つてのはあのスラッシュ
 YusPaiDā の母体

じゃないか?一応見つけたら報告するつてなつ
ちゃいるが・・・」

クルシスが遠くの方にあるスラッシュ YusPaiDā の母体の亡骸を見
ながら言つ。

ミラーズ 「倒しちゃつてあるわね・・・報酬出るのかしら?」

ミラーズもその亡骸を眺めて溜息をついた。

ミラーズ 「とりあえずもつ戻りましょ。スイレンは大丈夫
?」

スイレン 「ふあい・・・」

とてもふらふらしていて大丈夫そうには見えない・・・と浮遊して
いる短剣が、

いきなり地面に落ちる・・・が、その短剣は地面に着く前に消滅した。

クルシス 「とりあえず名無し、良くなつた。」

いきなり頭を撫でられる・・

名無し 「え？」

注意を受ける事ならした覚えがあるが、褒められる様な覚えは無い・・

ミラーズ 「まあ、貴方がいち早くここに辿り着いたから少女は助けられた訳だけどね・・・

少年の方は・・・まあ・・・

最後の方の言葉を濁した後に、少女を見る。

ミラーズ 「とりあえずこの子は保護しましょ、長銃を回収しなさいよ」

と、ここでミラーズに言われるまで少女が握り締めている長銃が自分の物だと

言ひのをすっかり忘れていた・・・

ミラーズ 「さて・・・気を取り直して戻りましょ

ちなみに、名無しが廃墟から突っ走ったあの森には転移装置が設置されていて、

転移装置を使えばすぐに街と行き来できたのである。

第十七話 帰還、魔物化の情報

転移装置を使い、転移装置管理施設に飛び、

そこから蝙蝠獣人の少女を医療施設に運んだ後に、報告書類を纏めてクエストカウンターまで向かった、その時に名無しの単独行動に関してと、

その時の状況と結果を記載した書類を提出後に、無許可の単独行動に対する厳重注意を受けた後に、やつとの事で開放されたのであった。

現在は厳重注意の際に指摘された物資の補給である。

クエスト出発前に準備しておぐのだが、ミラーズがまとめて用意したので、

名無しやスイレン、クルシスは所持していなかつたのだ、

そこの辺りもついでに注意されたのである。

名無し
「疲れた」

バックの中にリボルバーと護身用に手渡された魔力弾を使用しない

通常種の拳銃を入れ、

ついでに発信機と予備の通信機、携帯食料、応急処置キッド等を詰め込みながら、溜息をついた。

ミラーズ 「貴方のせいでしょうが」

ミラーズは手元にある携帯食料レーシヨンの使用期限を確認している。

クルシス 「報告は終つたし、保護した女の子の様子でも見に行くか?」

クルシスは既に準備を終えていて、大剣に砥石をかけている。

スイレン 「あの子は大丈夫でしょうか?」

スイレンは一番最初に準備が終つていて、手持ちの杖で地面を突いたりしていた。

ミラーズ 「大丈夫よ、傷に關してはちゃんと治癒はしたから」

クルシス 「こいつ見えてもこいつは医療技術は高いんだぞ」

ミラーズ 「こいつ見えても余計よ」

スイレン 「様子を見に行くんですか?」

ミラーズ 「準備が終つたらね」

手元においてあつた予備弾倉を掴み、中に弾薬が詰まつてゐるのを確認して、

バックの中の取り出しやすい位置に入れ。

それと、渡された弾倉を入れる為の飛び出し防止の止め金具付きのポケットのついた

ジャケットのポケット部分に弾倉を数分入れて、止め金具をしつかりとつけて確認する。

ついでに通信機を入れる部分に通信機を入れて、長銃用の光学標準^{スコープ}を取り付けて、

暗視ゴーグルと赤外線ゴーグルを確認してバックに入れて 完了。

バックの重量が40kg前後、ジャケットだけで重さが10kg程という重装備の完成である。

ここに、行く場所によつては酸素マスクや簡易テント等の機材も必要になるらしい。

とりあえず用意した物資に關しては自分の自室に置いておく。

用意された部屋は、そんなに広くは無く、クルシスとの相部屋であった。

以外にもクルシスは整理整頓ができていて、部屋はそんなに汚れていなかつた。

準備が終つたので医療施設に向かつた・・・

医療施設は住居区画から結構な距離がある。

と言つても都市自体がそんなに大きくないので、

離れている＝1駅分あるか無いか程である。

都市内は常に一定温度に保たれていて、酸素濃度も常に一定、

唯一足りない物は天然の太陽光のみである。

それ以外は完璧に整備された人間にとつての楽園のはずであったのだ。

地下都市というのは元々、地上での生活がだんだんとしぐぐくなつていつてしまつたので、

仕方が無く地下に生活に必要な環境を整えた空間を作成し、
そこに移住する計画が立てられたらしいのだが、

その計画は地下都市が各国に建設されて、いざ地下空間での生活を
～と言づ段階になつて

問題点が発覚した為、中止となつたのである。、

都市一つあれば中で数千年は人類は生きる事ができると言われてい
る。

だが一つの都市に居住可能な人数が人口よりも余りにも少なかつたため、

その問題点に関してをどうにかするまでは地下都市は使用禁止になつていたのだが、

その矢先に魔物発生の事件が起きたのである。

魔物化は海から始まつたと言われている。

海中に居る生物の殆どが肉食になつたり、異常な巨大成長や突然変異等が起きた。

次に鳥、昆虫が変異を初め、動物の変異が始まる頃には、人間にも変異の兆候が見られ始めた。

多量の変異化物質（当時の呼び名）を摂取すると、異常が起こり始める。

第一段階が精神汚染、ここまで進行した人の事を「狂人」と言い、

第一段階では精神不安に駆られ、疑心暗鬼に陥り、

辺りの者を形振り構わず危害を加えると言つ異常行動が見られるようになる。

第一段階が肉体汚染、ここまで汚染された人の事を「死体人」と言う。

第一段階では肉体的变化と知能低下が訪れる。

例えば腕部の肥大化、脳内組織の死滅、筋肉組織の異常発達、内臓器官の退化等が上げられる。

第一段階まで進行した時点で、元々の生物は、生物学的に「死」と断定される。

第二段階が完全汚染、完全な魔物化した個体として識別される。

第三段階では完全な肉体的な変化と、知能の完全な消滅が起きる。

肉体的には一足歩行ではなく四足歩行になり、皮膚組織の硬質化、視野感覚の退化

聴覚・嗅覚の異常発達等が上げられる。

第一段階までなら薬品等の投与により治癒が可能であるが

第一段階以上まで進行してしまった場合は、治癒は不可能である。

ちなみに、死体人は、人間を襲い喰らう事がある。

襲われた人間が死亡した場合、死体人の仲間になるが、

生き残つた場合は、狂人マッドヒューマンになる。

その為、ゾンビに襲われても生き残つて直にワクチンを投与すれば平氣マジなのが、

稀に突然変異を起こして一氣に魔物に進化する場合がある。

その場合、突然変異型魔物として、自我を保持した状態で魔物化する場合があるが、

極稀なケースの為、基本的にこの事はあまり知られていない。

第十八話 記録処理

自動的な肉体状態の検査と保管記録の整理を行います . . .

- ・第一注目事項 現在の肉体情報に関して
体温、血圧に異常は認められず。

肋骨の耐久度の減少を確認、

治癒完了までにかかる予測期間は
平常生活を継続した場合

時間表記にて48時間28分28秒後に完了

日付表記にて3日後の午後6時13分4秒に完了

睡眠や肉体組織の一時的停止による早急な治癒の場合

時間表記にて0時間0分23秒後に完了

日付表記にて同日の午後5時44分36秒に完了

体内に侵入した病原体による損傷、及びに体内組織の異常は発見で

きず。

侵入した病原体により発生した体内異常は無し。

筋肉組織に体積した疲労度合い

脚力組織：約38%

腹部組織：約27%

腕力組織：約43%

その他組織：約52%

全体組織疲労率：約45%

早急に疲労の除去に当たる必要性有り

以後脳内組織に関して

一部脳内組織の破損を確認

記憶の保有メモリー部分に通ずる回線の破損により

過去のデータの参照に問題が発生している模様

現在記憶中の脳内のデータ処理に関するデータライブラリを閲覧する為の回線に異常が発生している為、

データライブラリの参照及び保管に関する情報の提示が不可能となつていて。

前回記憶からの情報を参照として必要事項の記載は自動筆記にて行われております。

・第一注意事項 データ保管用メモリーの破損について

破損箇所は過去の記憶保管用メモリ全てに通ずる回線の破損

修復：可能 完了までの時間：1800時間と推定 早急な修復

が必要と判断

データライブラリ参照の為の回路の破損について

修復：不可能 不可能な場合のマニュアルを参考に行動を指示

・第一記載事項 人物

第一人物 スイレン（仮名） 性別：女 身長：158・2cm

体重：48・3kg 戦闘力：A

記載事項：空間に対する固体情報および時間概念のズレを確認 今後も注意する必要有り

第二人物 クルシス（仮名） 性別：男 身長：174・3cm

体重：62・8kg 戦闘力：S

記載事項：近距離戦闘時に協力な火力を誇る、敵対した場合は超接近戦に持ち込む事により対処可

第三人物 ミラーズ（仮名） 性別：女 身長：163.2cm
体重：53.2kg 戦闘力：S

記載事項：治療術に長けている、敵対した場合は最優先で排除しなければならない

第三人物 老人（名称不明） 性別：男 身長：163.4cm
体重：53.2kg 戦闘力：？

記載事項：主な情報は不明 情報の所持者であるが不鮮明な情報である

第四人物 女の子（名称不明） 性別：女 身長：124.3cm
体重：33.8kg 戦闘力：SS

記載事項：妹を名乗る女の子、普通の人間ではない。 固体情報にズレを確認

第五人物 少年（名称不明） 性別：男 身長：152.8cm
体重：52.3kg 戦闘力：B

記載事項：既に生命活動の停止を確認

第六人物 スミレ（仮名） 性別：女 身長：118.5cm 体重：34.2kg 戦闘力：A

記載事項：蝙蝠獣人の少女 推定年齢10歳前後

その他記載不要候補者 23名

記載身長および体重は視野確認による推定数値 誤差±3.5

・ **第一記載事項** 視野感覚デバイスに起きた異常に關して
再燃現象フラッシュバック 等の異常を確認

原因是記憶保管用メモリに通ずる回線の破損が原因と見られる。一部データを送信時に回線の破損箇所を通過する際にデータが破損し、映し出される映像や音声がボケていたりずれたりする場合が確認されている。

- ・ 第二記載事項 記憶データのバックアップデータに関して
今までの記録のバックアップデータの保存の際に
記憶データおよびデータライブラリ参照の回線の破損によって、
思考、感情に関するプログラムデータは前回のバックアップデータ
との
差異が大多数検知されたため、バックアップデータ保管マニュアル
を
参考に別のフォルダ及びにメモリーに保管。
過去のバックアップデータ呼び出しの際に思考、感情のプログラム
データが
多重する事になるため重大なバグや不具合が発生するものと思われる。
上記記載事項から過去の思考、感情に関するプログラムデータを
バックアップデータからサルベージ及びに現在プログラムに
上書きする場合は厳重な忠告の表記を致します。
- ・ その他記載事項
38%以上の肉体組織（脳を除く）を損失した場合
現在状態表記を行動不能
緊急治癒状態の発動

以上の情報の以下の情報に書き換えます

- 25%以上の肉体組織（脳を除く）を損失した場合
現在状態表記を戦闘不能
緊急治癒状態の停止

記録の整理と設定の変更が完了致しました。

第十九話 蝙蝠獣人×フルーツフード

医療施設 と言つたが医療施設の集まつた医療区画に到着はしたのだが、道中の記憶が曖昧なのだ。

クルシスとミラーズの後を、スイレンと並んで歩いていて、二、三言スイレンと言葉を交わしたはずなのが、

その内容が全く思い出せないし、なんて返答したかも思い出せないのである。

そして、なぜかスイレンは少し俯き氣味で、落ち込んでいる。

準備をしていた住居区画から出発した時は、普通だったので、

落ち込んでいる原因は明らかに道中の自分との会話の筈なのだが、なぜか会話の内容をまったく思い出せないのである。

そんな事をグダグダと考へながらクルシスとミラーズの後を着いて行く。

カウンターで保護した少女が「えられた病室の場所を教えてもらい、そこに向かう。

医療施設と言つだけあって、中は清潔に保たれていて、

・ 真っ白で薬品の匂いが漂っている そんな場所の一室の扉の前・

クルシスがネームプレートの部分を確認して扉の前に立ち、扉をノックする。

？？？ 「はい？」

中から少女の返答 名は確かスミン である。

クルシス 「入るぞ」

？？？ 「え？」

中から聞こえてくる少女の声は何故か淡々としている。扉を開けて中に入る。

何処の病室も作りは同じなので、

名無じがいの都市で目覚めて最初に見た病室とまったく同じ内装であった。

少女は部屋におかれたベッドの上で体を起こしてこちらを見ていた。

？？？ 「貴方は誰？」

淡々とした言葉で、クルシスを指差して聞いてくる。

クルシス 「おう・・・?俺はクルシスだ・・・が?」

戸惑い気味にクルシスが返答する。

？？？ 「貴方は？」

今度はミラーズを指差して質問してきた。

ミラーズ 「私はミラーズよ」

慌ても戸惑いもせずにミラーズが返答する。

？？？ 「貴方は？」

今度はスイレンを指差して質問をしてきた、人を指差すのは癖の様な物なのだろうか？

スイレン 「えと…スイレンです」

クルシスと同様に戸惑い気味にスイレンが返答をする。

？？？ 「貴方は…助けてくれた、恩人、名前は知らない」

最後に名無しを指差して その時になつて気がついた 少女の瞳は機能していない。

名無し 「えと…名無しだ、それよりも…眼は

スミレ 「私はスミレ、今は視力が無い」

こちらの言葉を遮つて少女が自己紹介をした・・・　スミレの台詞に違和感を感じた・・・

今は視力が無い・・・と言う事は過去には視力があったのだろう・・・

視力を失ったのは切裂蜘蛛スラッシュ・シユ・スペイダーとの

戦闘時であろう・・・確かに顔に対しては攻撃を喰らつていらない筈であるが・・・

普通の人間なら一番の情報源の視力を失つたら慌てるなりなんなりするはずである。

それなのに慌てていない・・・それに見えない筈なのにこちらの人数と立ち位置を把握している・・・

ミラーズ　　「視力が無いってどういうこと?」

スミレ　　「それよりも、シーライは命を落としましたか?」

スミレは質問に答えずに逆に質問をしてきた。

クルシス　　「シーライ?」

名無し　　「一緒に居た奴か?」

スミレ　　「はい、私と一緒に居た男です、十中八九命を落としてますよね?」

あの戦闘の時に守りきれなかつた少年の名なが出てゐて、名無しは少し俯いてしまつ。

名無し 「すまん・・・」

スミレ 「何故謝罪するのですか？貴方は命の恩人なのですよ？」

スミレは不思議そうにこちらを向いて首を傾げてゐる。

名無し 「いや、守りきれなくて」

スミレ 「別に良いのです、あの人はあの時命を落とさなくともいすれは命を落としたので」

クルシス 「どうして」とだ？

スミレ 「あの人は私と契約コンタクトを結んでいたのです」

ミラーズ 「契約コンタクト？」とりあえず、視力が無いって言つのも含めて説明してくれない？」

スミレ 「良こですよ、少し長くなりますが」

やつとスミレは自分の種族と特性に關してと、あの少年との関係に關して話を始めた。

蝙蝠獣人^{フルーフフーデ}であり、年齢は普通の人間に換算すると11歳らしい。

蝙蝠獣人^{フルーフフーデ}の特徴は背に生えた皮膜の張った蝙蝠のような翼と、

特殊な器官を使用した音波による位置や空間情報の把握である。

視力が無いというのは少女自身の生まれつきの病気で、蝙蝠獣人^{フルーフフーデ}とは無関係らしい、

病室に入ってきた人の人数を把握できた理由と、大体の位置を把握できた理由はそれらしい。

少女は蝙蝠獣人の中では相当な地位を築いている血筋の物らしい事、
少年は少女の付き人である事、そして契約^{ハシタクト}を結んでいた相手らしい。

第一十話 吸血鬼へヴァンパイア

蝙蝠獣人の中でも、スミレは地位の高い位置を陣取つてゐる血筋の
フルーツフルーテ
娘らしい、

シーライといつ少年はスミレにつけられた世話人及びに護衛だった
らしい、

そして、スミレはいわゆる遺伝的な病氣によつて視力が無いのである。

しかし、蝙蝠獣人の中でも、地位が高い血筋なのに、欠点もしくは
欠陥がある事に

対して、スミレの叔父が大いに嘆き、数多くの方法を試して、欠点
を補おうとした結果が

“^{コントラクト}契約”と言つものが完成した。

“^{コントラクト}契約”とは、^{ロード}契約者に對して、^{スレイヴ}契約側が生命力を削つて

契約者に對して特定の効力を發揮する魔法を常に使い続けてゐる状
態の事である。

今回の場合の契約者はスミレ、^{スレイヴ}契約側がシーライにあたる。

契約の効力はスミレの視力の回復だといつ。

契約側である、シーライが命を落としたため、^{コントラクト}契約が強制解除され、
スレイヴ

スミレの一時的な視力回復の「^{「」}」契約が解け、視力を失ったという訳らしい。

この契約は^{「」}契約側の寿命を物凄い勢いで削っていく、
そのため、スミレが言つていた「あの時命を落とさなくても～」といふのは、

シーライに残された生命力が残り少なく、もうすぐ死ぬといふ事だつたらしい。

スミレ 「他に説明は必要かしら？」

見えていない筈の眼でこちらの眼を射抜きながら、淡々と語つてゐる少女は

まるで^{オートマタ}機械人形、そんなイメージを受けた。

クルシス 「あん？ 何でそんな地位の高い血筋のお嬢様なんだろ？ 何であんな所に居たんだ？」

ミラーズ 「確かに、護衛がその契約者の少年一人つてのは可笑しいわよね？」

クルシスとミラーズの言つ通りで、それだけの地位を持つてゐる血筋の娘ならば、

あんな危険な場所に居るのは可笑しいはずである。

スミレ 「単純に逃げ出してきただけ」

またしても単調で、まるで原稿用紙に書かれた事をそのまま言つて
いる様な感じの言い方。

スイレン 「逃げ出してきた？」

スミレ 「そう、逃げ出してきた。」

今度はスミレがスイレンの方を向く、その際に首だけを動かしてス
イレンの方を向いた、

そして淡々と口が語りだす、本当に機械人形にしか見えないのだが、

簡単な治療をミラーズが行つてゐるし、ここに来てからもちょっと
した検査を行つたので、

機械人形ではないのは確かなのだが、やはり印象は機械人形っぽい
印象を受ける。

スミレ 「今の血筋を残す為にと、やりたくない事を強制され
たので逃げ出してきた」

スミレの淡々とした説明を纏めると、スミレは叔父上の強制的な命
令に嫌気が差し、

世話人兼護衛をかねていた契約側の少年のシーライを引き連れて、
スレイヴ

蝙蝠獣人達が暮らす小型都市から逃げ出してきたらしい。

都市の外は危険なのは理解していたが、あの都市に居る方が危険だと判断したらしい。

都市名は「ブランド」と言う名称の、小規模地下都市らしい。

その都市の位置はこの都市から徒歩で半日、車両を使って2時間程の場所らしいのだが、

スミレの言う地域座標には何も無い、

外部との連絡用手段の無線システムが機能していないのか、機能させていないのかどちらかである。

スミレの説明だと、その都市の蝙蝠獣人フルーフルーフーデの大半はあまり友好的ではないらしい。

基本的に好戦的でもないが、排他的であり同種族間での仲間意識が強い、

そのため、外部の人間等を歓迎したりはしない、むしろ追い返されるのが関の山だらうと言つていた。

そして、スミレは今後の行く当てが全くないので当分の間はこの都市に住むという事になった、

視力が無いとは言え、人間には無い超音波を発し、感じ取る器官があるので、

視力が無くても日常生活に支障はないので、今の所“**「コントラクト」**”に^{コントラクト}は契約側

契約側の^{スレイヴ}人間を探す気は無いらしい。

契約側^{スレイヴ}になる為の条件と言つのは特にある訳ではなく、

契約者が^{スレイヴ}契約側に誓いをさせればいいのである。

誓いと言つのは^{スレイヴ}契約側の体液を^{スレイヴ}契約者が飲んで、

その後、^{ロード}契約者の体液を^{スレイヴ}契約側に飲ませれば完了^{アーチ}と言つ事らしい。

体液と言つのは基本的に血液で行う。

そのため、^{フルーチフード}スミレの血筋の人間は^{ヴァンパイア}蝙蝠獣人の中でも^{ヴァンパイア}吸血鬼と呼ばれていたらしい。

だが、基本的に伝承に出てくる吸血鬼と違つて、犬歯が尖つているわけでも、

太陽の光、^{クロス}十字架、水が苦手な訳ではないし、杭で心臓を貫かなければ死なない訳でもない。

生命力自体は通常の^{ヒューマン}人間と変わりは無い。

ただ、二ノ二クだけはスミレ血虫が苦手らしい。

第一十話 吸血鬼『ヴァンパイア』（後書き）

作者様がログインしました。

名無し様がログインしました。

名 「……よし、弁解を聞いてやらん事も無いぞ?」

作 「やほー、始めましてー」

名 「無視か?そんなに脳漿撒き散らしたいのか?期待に答えるぞ」

作 「まずは弁解だ、ちょっとまつて名無しくん、そのおつそろしい銃口を

今すぐ下ろして貰えないだろ?つか?」

名 「わつわと言え」

作 「もうつ、人使いが荒いんだ…」ごめんなさい[冗談です。
えとー気がついた人は多いと思うけれど、3週間ぐらいいぶりに
更新です

更新が大幅に遅れた理由は聞かないでお願いします。
単純に忘れてただけですので…」

名 「ほお?忘れてたと?んで?もう一つ、後書きが二十話に来て
初とか

どうこう事よ?ええ?」

作 「いやあ…後書き何を書けば良いのかわからなくてさ」

「

名 「他の作者のを参考にして書けよ…何してんだよ」

作 「…他の作者の作品を参考にする為に読み漁つてた?」

名 「それってミイラ取りがミイラになる…じゃねえか?」

作 「違うんじゃね?」

名 「……まあいいか、んで?主人公の紹介は?」

作 「しねえよ?」

名 「は?」

作 「いやだつて面倒だし面倒くせこしめんじゃし」

名 「ああ…ああー…」んな作者で悪いな、つん、ほんとじめんな

作 「誰に謝つてんの?」

名 「読者の皆様だよつーー何考えてんのーあんたの作品だろつー」

作 「え?こんな物見てくれる人居んの?その人頭大丈夫なんだろうか」

名 「お前え…少なくとも作者のが駄目だ」

作 「褒めても能力アップしないぞ?」

名 「褒めてねえよっーお前マジで大丈夫なのかっー」

作 「褒めて無いのか…まあ、ここからで終わらしね?」

名 「おー、読者の皆様に言つ事あんだろ?」

「更新遅れてスマセんとか後書き」十話に来てスマセんとか

作 「え? 面倒くさい、んじゃ、俺さナナドリ2020やんなこと
だし もうこくねー」

名 「おおこつーお前つーふざけんなよー」

作者様がログアウトしました。

名 「……ああ、えと、色々遅れて申し訳御座いました

いや、本当に読んでくれる人居ないと困りけど、
あんななんでも頑張つて更新する… させるんで、
生暖かい目で射殺して…見えていてあげてください。

とりあえず、今回の後書きはこれ…後書き? 最初がログインで…
作者え…ゲームのやつすぎだら…

とりあえず、読んでくださいる皆様ありがとです~…

名無し様がログアウトしました。

第一十一話 忠実『Faintuffle』

スミレに一通りの都市の規律と概要を説明した後に、スミレが「眠い」と一言発した為、

スミレの病室を後にした。

その後は、居住区画にある『えられたクルシスとの二人部屋に戻つて来たのだが、

クルシスが真っ先にベッドにダイブしていびきを掻き始めていた。

名無じはとりあえずシャワーを浴びて、

用意されていた簡素なパジャマを着て、机の上に銃を並べていた。

目の前の机の上に並べられたFog-10と老人に渡された長銃を眺めている。

眺めていると、少しだけ違和感を感じた。

Fog-10のトリガーガードが長銃の方と比べると分厚く、何かを固定する為の金具が取り付けられている。

バレルの下の部分にも同じ様な金具が取り付けられている。

Fog-10を手にとつて、自分のベッドに置かれている枕に向かつて構えてみるが、

その金具にどんなパーツを取り付けるのかは想像できない…

クルシス 「何してんだ？」

名無し 「うおつー？」

先ほどまで寝息を立てていたはずのクルシスがいつの間にか名無しの背後に接近していた…

クルシス 「ん？ そういうえばその銃…銃剣装着可能じゃないか？」

名無し 「銃剣？」

銃剣とは、銃口下部に取り付けるナイフの事を指す。

基本的に白兵戦の時に使われる刺突用の刃物である。 今回の場合は、回転式拳銃の銃剣は、

銃の下部、トリガー・ガードからバレルにかけてに對して短剣の機能を持たせるための部品の事である。

一般的な銃剣は銃に取り付ける剣だが、クルシスが言う銃剣は銃 + 剣の様な感じのものである。

元から、剣と言う枠組みに、剣の性能を取り入れた感じの物である。

銃と言う枠組みに、剣の性能を取り入れた感じの物である。

く、

クルシス 「んー・・・ちょっと待つてろ」

そう言つとクルシスは机の引き出しを開けて、その中を入念に調べ始めた。

そこで先程の自分の考えが少しばかり固定概念に囚われていた事を自覚した。

F09-10は回転式拳銃リボルバーで、射撃が基本的な攻撃となる。

その為、銃と言つ機構の特性を注目して、

金具に固定するのは命中精度を上げたりするパートをつけるのだと
思い込んでいた…

F09-10を机の上に置いて、クルシスの方を見ると、丁度棚から何かを取り出している所であった。

クルシス 「ああ、あつたぞ」

クルシスが取り出したのは、名無しの持つているF09-10と同じ会社が作成した

同形式の回転式拳銃リボルバーである。F09-10に比べて軽量で、扱いやすい型で、

こちらは中折式トップブリケイクで通常の弾丸が使用可能なタイプである。

しかし、今クルシスが取り出した回転式拳銃はF09-10と同等リボルバー。

の重量がある。

理由はそのリボルバーの下部にはバレルからトリガー・ガードを覆つ
様に

ナイフが取り付けられていた・・・

クルシス 「こいつは Faithful-02だ、その回転式
拳銃と形状は同じだが、

こちらは主に強化プラスチックと軽量合金で出来て
いるから

後付の銃剣を取り付けるとその Fog-10と同じ
ぐらいの重量になるんだ」

名無し 「えと・・・？」

クルシス 「刃の部分自体は軽量合金を使っているから、

刃が欠ける事は無い、それに切れ味も相当あるぞ？」

名無し 「・・・？」

クルシスの言いたい事が良くわからないので、返答に困り、言葉を
詰まらせる。

クルシス 「ほら、この Faithful-02やるよ、こいつは通常弾丸と魔弾、両方とも
使えるから護身用にもなるし、銃剣が着いてるから
接近戦にも使えるぞ」

そう言つとクルシスは銃剣付きのFaithful-02を銃剣を装着したまま収納可能な

レッグホルスターに突っ込んで 投げて渡したので、とりあえずそれを受け止める。

名無し 「えと・・・ありがと」

とりあえずお礼を言つとクルシスがこちらを見て、何かをボソボソと呟きだす。

名無し 「どうい・・・」

何を呟いているのかを聞く「う」と思い、口を開くも、急激な眠気に苛まれ、バランスを崩し

そこで名無しは完全な眠りに落ちた・・・

手からはFaithful-02が入ったレッグホルスターが滑り落ちた

倒れきる直前にクルシスが名無しを抱きとめた・・・

クルシス 「お休み・・・ふふつ・・・」

抱きとめた名無しをクルシスが、空いていたベッドに名無しを寝かせる。

名無しに布団をしつかりとかけると、クルシスはもう一つのベッドに視線を移す。

”そこには、アホ面で寝息を立てるクルシスが寝ていた。”

クルシス（？） 「問題点は多数か・・・まあ、大丈夫かな？」

クルシス（？）はその背格好に見合わない無邪氣な笑顔を見せて、床に落ちていたホルスターに突っ込んであるFaithful-02を拾つて、

ホルスターからFaithful-02を引き抜いて名無しに銃口を向ける。

？？？ 「あはは、簡単な睡眠の魔法にかかりちゃってさばかみたいだよねー」

銃口を名無しに向けた人物はいつの間にかクルシスではなく旧魔王城で出会った女の子になっていた。

女の子 「くすくす・・・まあ、お母様には怒られちゃうかなあ・・・じゃあね、お兄ちゃん

「また運が良ければ会おうね？」

Faithful-02をホルスターに素早く収納し、それを名無しの銃が並べてある

机に投げる…Faithful-02が放物線を描き、机の上に落ちる頃には

女の子の姿は搔き消えていた。

第一十一話 悪夢

赤黒い人の血肉と、醜く歪み姿を変えた魔物の血肉の混ざり合った液体が大地を染め上げている。

その大地の上を走り剣を振るい銃を発砲し、魔物を倒すのは人間。爪や牙、時には翼を振るい、人の命を刈り取るは魔物。

戦力は五分と五分。

人間は協力な魔導兵器を持ち出し、魔物を粉碎していく。

魔物はその強靭な肉体と、魔法を使い、命を刈り取つていく。

一瞬だけそんな映像が目の前に広がり、霧散していく。

次の瞬間には別の映像が目の前に広がっていく。

銃を握り、真っ紅に染まつた視界の中、白衣を着た女性を捉える。

瞬間に銃を相手に向け、魔弾を連続射出する。

小規模な魔法が複数同時に発動し、その女性を粉微塵にせんと襲い掛かるも、

腕の一振りでその魔法は霧散し、次の瞬間には

鼻が触れ合いそうなほどの中距離に女性の顔があり、何かを呟いている。

「…ロ…シ…テ…ア…ゲ…ル…」口の動きからそう言つてこらし
い事は判つた。

女性が顔を離し、右腕を振り上げ。それが振り下ろされ、自分の
頭にめり込んでくる。

その瞬間で目の前の映像は霧散し、別の映像が目の前に広がつてい
く。

自らの手に握つているのは独特の「反り」を持つ刀に似た緋色の剣。

目の前に広がるのは無機質な感じの濁つた白色をした壁の通路であ
る。

その通路を自分は高速で走りぬけようとしている。

通路の進んでいる方向の天井の壁から何かが迫り出してくる。

四角い箱状の物体がせり出してきて、その箱状の物体に取り付けら
れた

レンズがこちらを捉えた瞬間に左右の壁から自動迎撃用火器がせり
出してきて、

「さうに照準を合わせ、瞬間で射撃を開始した。

速度を全く落とさずに刀で飛翔してくる弾丸や砲弾、果てはミサイルを

弾き、刻み、真っ二つにつつも、奥に進む。

やがて、迎撃装置の攻撃も止み、通路の先に両開きの扉が見えてくる。

その扉に向かつて走り、扉を叩ききり中に突入

その瞬間で目の前の映像は霧散し、別の映像が目の前に広がつて

血飛沫で紅く染まっているのか、夕暮れで紅く染まっているのか、

それとも眼球に血液が溜まつて視界が紅くなつていたのか・・・

そして、至近距離で少女の顔を見たと言ひ事は覚えていても、

その少女がどんな表情をしていたのか、 どんな造形の顔だったのかすらも思い出せない。

そんな説明をクルシスにすると、クルシスは

「何だお前・・・もしかして血が好きとかそういう奴か?」

と少々酷い感想を述べていた。

朝起きた時にはクルシスは既に目覚めていて、

クルシスがこちらの顔色が悪いのに気がついて声をかけてきたので

変な夢を見たことにに関してを話したのである。

このことを//ラーズとスイレンにも話したのだが・・・

名無じの過去に関して何か判るかもしれないといつ事で//ラーズが詳細な質問をしてきたのだが、

所詮夢なので詳細までは思い出せる訳も無く、ミハーツの質問に関しては殆ど答えられなかつた。

朝食を食べる為に、ギルバの大食堂で召無しの夢に関して話をネタに

固体栄養剤、液体栄養剤と言つ簡素な物だつた・・・

味は期待しちゃ駄目だとミハーツに言われていたが、

固体栄養剤は、簡単に言つとカロワーメイトの様な感じのクッキーっぽい物で、

液体栄養剤は、チューブ型の容器に入ったゼリーの様な飲み物である。

どちらも、味は色々な栄養薬を凝縮した物なので、最悪である。

ミハーツ「吐かないでね、食料は貴重だから」

スイレン「うう・・・」

ミハーツは普通に食べているが、スイレンは明らかに我慢しながら食べている。

クルシスは美味しい美味しいと言つて食べている。味覚が狂つているんだと思つ。

名無し「うう・・・それで、今日は何をするんだ?」

とりあえず今後の予定を聞いておいたがと思つた。口の中にまだ味が残つている。

ミラー「貴方の手掛けりが見つかると思ったんだけどね、足りないみたいだつたんだけど」

そして、次の当てがないから、居からはクエストをやつてもらつて、その中で記憶探しも

やつしていくつ感じかしらね？」

クルシス「だな、基本的にスイレンと行動を共にしてもらつ事になるな」

スイレン「判りました」

ミラー「そうね、名無しとスイレンは知り合いだつたっぽいしね」

クルシス「んでー、今日からクエスト受けてクリアするーつてのを繰り返してくれ」

名無し「はい」

ミラー「私とクルシスは別のクエストに行くけど、貴方達二人でも大丈夫・・・よね？」

名無し「問題ないとと思つ」

「魔術結社」ギルドでは、基本的に地下都市の主要出入り口付近に現れる魔物の討伐や

都市内部で不足している物資の調達が基本的なクエストである。

難易度は基本的に討伐の方が高いが、物資の調達も時には最高難易度クエストになる時がある。

クエストは種類に応じて「討伐」、「調達」、「護衛」、「輸送」、「調査」の五種類にわけられる。

主に「討伐」のクエストを行う生業の者達を「^{ハンター}狩人」と呼び、

主に「護衛」のクエストを行う生業の者達を「^{ディフェンダー}守者」と呼ぶ。

この様にそれぞれのクエストを行つ者達には簡単な二つ名の様な物がつけられる。

「輸送」は「^{キャリヤ}運屋」、「調査」は「^{スコッタ}観測手」、「調達」が「^{シーフ}盜賊」である。

そして、職業に関しての二つ名以外にももう一つ別の呼び名がつけられる時がある。

クルシスの場合、その大剣で敵を叩ききる様子から「^{ヒックストラッシュヤー}叩斬者」のクルシスと呼ばれる。

ミハーズの一つ名は「月下鋼刃」^{ブレイブサーベル}である。

名無しは相当高い実力を持つているので、一つ名があつても可笑しくないんじやないか？

と云つことで、過去のリュウと云つ名無しと同じ訓練成績を持つていた者と同じ一つ名がつけられた。

その為、現在は「^{ハイスクショット}高速射撃」の名無しと呼ばれている。

スイレンは「^{デュアルソーサリー}多重魔導士」のスイレンといわれているらしい。

「魔術結社」ギルドには他にも色々な一つ名を持つ人たちが居る。

ちなみに、ここにギルドで最強と言われているのが、

「ホールと云つ名の男で、一つ名は「^{ジェノサイドハリケーン}殲滅風」である。

基本的につけられた一つ名は、身体的特徴もしくは戦闘時の特徴を現したものであるのが多い。

名無しは「^{ハンター}狩人」の「^{ハイスクショット}高速射撃」の名無しと云つぱつたらしき名前で

ギルドのギルド員リストに登録されている。

名無しは「^{ハンター}討伐」クエストを基本的に生業としてギルドの中では既に有名人である。

名無しは「討伐」クエストを基本的に生業としてギルドの中では既に有名人である。

練習の時点では相当な実力を発揮していて、実戦でも相当な戦績を残しているのである。

当たり前と言つていえば当たり前なのだが・・・

これだけ有名になれば名無しに関して何か知つていてる人が現れてもおかしくはない、

しかし、これまで全然情報が入つてこない・・・

理由は不明 ではない。

大体予測はついているのだが・・・

・予測

名無し＝リュウ

スイレン＝ルイ

老人が言つていたリュウとルイは名無しとスイレンの事で、
テレポートの事故によって現在に飛ばされ、
事故によって記憶を失つた。

だが、この予測だと結局の所、名無しが何者なのかわからないのである。

再度老人の話を聞いてみたところ、

名無しはフーラリと都市に現れ、ギルドに登録する事無く、

ギルドの手伝いをしていて、魔王討伐戦に加わったとの事であった。

すると、都市に現れる前、名無しとスイレンは何をしていたのか？
と言ひ疑問が残る。

疑問は増えるばかりである。

今日もクエストカウンターでクエストを受けて、討伐をしている最中である。

討伐対象は「大鼠」^{ピックラット}と言ひ、その名の通り唯の大きな鼠の討伐である。

名無しは「F08-10」はホルスターの中にしまってぱなしで通常弾丸と魔弾の高速切り替え可能な銃剣付き「F a i t h f u l -02」を右手に持つて、

接近戦時の斬撃と射撃を行い、通常弾丸のみ使用する自動式拳銃の「FN ブローウィン・ハイパワー」

で眼や口を狙つて射撃する。

通常弾丸の場合、相手の皮膚を貫く事が出来ない場合があるので比較的軟い目や口を狙うのである。

後方からスイレンが「短剣舞踏」^{ナイフカーニバル}と言つ

魔力の短剣を作り出し、血の周りに浮遊させ、ガードしたり攻撃したりする魔法である。

それで血の体を守りつつ、短剣を飛ばして攻撃したりして援護している。

普段の戦闘もこのような感じで進めている。

と言うつゝ、一人で戦つとこの間にか一いつ陣形で戦っているのである。

記憶を忘れても、行動では覚えてこると言つ感じだろうか？

この戦い方は安定していて戦いやすい。

名無じは背後からの攻撃は気にしなくて良い、スイレンが援護してくれるのが判るから、

スイレンは接近してくる敵は気にしなくて良い、名無じが射撃してくれるのが判るから。

互いが互いを無意識のうちに庇いあって、それで居て全然危なつかしくないのである。

過去にこの戦闘方法で長期間戦闘を繰り返していたのはわかる。

その為、記憶探しは基本的にスイレンと共にに行つ様にしている。

第一十四話 盲目の少女

蝙蝠獣人フルーリフーデにとっては、辺りが明るからうが暗からうが関係無い。

音波による地形情報及びに付近に居る生命体の把握は簡単にできる。

だからといえ、視力が無いのは少し不便である。

音波による地形情報の獲とくは、対外の場合、

目の前に何かあるか何も無いか、目の前の物質は何なのか、

音波の反射によって獲る情報は、曖昧すぎるのである。

しかし、それは普通の蝙蝠獣人フルーリフーデの場合である。

元々生まれつきで視力を失っていた自分は、

音波による地形情報獲とくの技術が他の蝙蝠獣人フルーリフーデに比べて異常に高
く

辺りの情報を的確に得る事が出来る程である。

普通の蝙蝠獣人フルーリフーデなら、人間を音波のみで把握しようとする

人型の水を多量に含んだ物としか判らない。

しかし、自分の場合はもっと細かく、どんな体型で、大体の性別も

何となく判る。

そんな感じで普通の蝙蝠獣人^{フルーフルーフーフ}よりは優れているのであるが、やはり音波で獲る情報には限界があるし、

その限界の所為で色々と大変なのである。

例えば

ミリーズ 「ほら、ああ～ん」

今現在の現在の地形を把握すると、

自分の前にプラスチック製の机があり、机を挟んだ反対側にミリーズと言う女性が座っている。

そして、机の上には食べ物が入った金属製の食器が置かれていて、皿の前のミリーズと言う女性がスプーンで料理をすくい、こちらに食べさせようとしているのである。

ミリーズ 「ほら、どうしたの？ 食べたくない？」

この女性は、別に嫌がらせをしている訳ではなく、悪気があるわけでもない。

唯、スミレ一人だと料理をまともに食べられないからである。

スミレ 「いえ、ありがとうございます」

とりあえず、口を開けて、その料理を食べさせてもらひ。

病室に設けられた机と椅子を出してきて、

料理を食べさせてもらひしている理由は、

先刻も述べたとおり、スミレ一人で料理を食べる事が出来なかつたからである。

一人で食べようと思えば食べられなくも無いが、

一人で食べていた時は、とても危なつかしかつたらしく、

偶然やつてきたミラーズが食べさせてくれる事になつたのである。

まあ、視力が無い状態での食事と言つのは結構難しいといつ事を学習したのだが、

今後、食事の時は誰か人を呼んで食べさせてもらひよう」と、

食器類を持って出て行くミラーズの一言を聞き流し、

ベッドに戻ろうとして ガゴンッと音がして、足に痛みを感じたときには遅く、

机を巻き込んで盛大に転倒してしまつていた。

ミラーズ 「ちょっと大丈夫?」

音を聞きつけて直にミラーズが戻ってきたらしい。

スミレ 「大丈夫です」

膝が痛いが、気にする程でもないので、大丈夫と返答しつつも、立ち上がりうとして…

ミラーズ 「怪我してるじゃない」

接近していたミラーズに抱きかかえられ…続に言ひ言ひ姫様抱っこみたいな感じで…

驚いて、硬直していると、ベッドに下ろされ、右足を掴まれた。

ミラーズ 「消毒するから大人しくしてね。」

ミラーズが何かを取り出している音を聞きつゝもやはり視力が無いと不便と言つ」とを噛み締め、

契約側探ししないといけないかな?と心の中で思つた。

スミレ 「いつ…」

膝に消毒液をつけられたらしく、結構しみたので声を上げてしまつた。

ミラーズ 「ごめん、痛かった?」

スミレ 「いえ、ちょっとしみただけです」

ミラーズ 「そう、じゃ絆創膏貼つておくわね」

ミラーズが絆創膏をスミレの膝に貼り付ける。

眼が見えないので多分だが、膝を覆う程の大きさの絆創膏を貼られたのだと思う。

ミラーズ 「うんうん、これで大丈夫ね、次からは気をつけてね」

スミレ 「はい」

ミラーズ 「じゃ、私は医務室に行つてくるわね」

そう言つとミラーズは応急処置に使つた救急箱を何処かに収納してから、

倒れていた机と椅子をなおして出て行つた。

先ほどの事から、視力が無いのは不味いと言つのは良くわかつた。

出来るだけ早急に契約側を見繕わなくてはならない。

だが、契約側には圧倒的な悪条件がつくるので、

自らなりたいと申し出るものは殆ど居ない。

強引に契約するという手もあるが、派手な行動をとるのは不味いだ
る。

「このギルドに話を通してみて、^{スレイヴ}契約者を探してもう一つの
は、

多分無理だ、自分一人のために人一人を犠牲にするのは良くない。

と言つより、自分自身で他人を犠牲にしてまで視力を欲した訳ではないと否定しつつも、

視力があつた方が良い^{コントラクト}というので契約をどうしようと考えていた事
に、

自己嫌悪を抱いてしまつ。

これでは祖父となんら変わりないではないか…

普段は顔の筋肉は口以外まつたく動かさずに会話し、相手に心内を見せない様にしている。

なので、心の中の醜い部分は誰にも見られていない自信はある。

伊達に陰謀に塗れた祖父の様子を見ていた訳ではない…

笑顔の裏で常に相手を利用し、蹴落し、己がのし上の事を考えている人物ばかりだったのだ…

俗に言つ“貴族の娘”と言う私の看板を欲しがる者は沢山居た…

祖父はそんな私を政略結婚とやらの道具にしようとしたのだ…

自分が得をする為に他人を利用する等はしたくない…

だけれども、誰でも良いから契約「コンタクト」を結んでくれる人物が居ないかと、

卑しい自分が心の中で囁きかけてくる。

その囁きを無視して、とある詩を口ずさむ。

もしもキミに視力があつたら この景色を見せてあげられるのに
もしもキミに心があつたら この好きで癒してあげられるのに
ボクの命なんていらない キミが唯一笑顔で居てくれれば
ボクの命なんかよりも キミの笑顔が大切だから……

コンタクト
契約「コンタクト」を行つ前日。

契約「コンタクト」側に選ばれてしまつた少年が閉じ込められていた部屋に、

両親に内緒で尋ねていつた。

その時にスミレは契約「コンタクト」側の少年に問うた。

「貴方は、死ぬのが怖く無いの？今なら脱走の手助けをしてあげる」
そんな風に、

今と同じで無機質な声で問うた。

少年は契約者である私を見ると、こう答えた。

「僕は君の笑顔の為ならこの命を捨ててあげられるよ」と…

そして、先程の詩を歌ってくれた。

少年は世話人として私の付人をしていた。

その頃はまだ、祖父の薄汚れた陰謀を知らず、無邪気に笑っていたのだ。

その時の契約側は私の両親である。

両親が死んで、スミレが祖父に引き取られるまでは、

無邪気に笑つて過ごしていた…両親が死んだ。目の前が真っ暗になつた。

契約の効力が切れて、視力を失つた。そして、祖父に引き取られた。

祖父は視力がない私を見て、即座に契約側を探した…

白羽の矢が立つたのは、世話人として私と一緒に居た少年…シーライだつた。

私は反対をした、だけれども祖父は私の意見など聞いていなかつた。

祖父はシーライを部屋に閉じ込めて強制的に契約を結ばせようとした。

だから、私はシーライを逃がす為にシーライの閉じ込められた部屋に向かつた…

答えは 否定 だつたのだけれど…

第一十五話 襲撃

部隊に指示を出し、都市に侵入した化け物共を倒そうとする、

しかし、都市に侵入してきた化け物共は迎え撃つこちらを罵々と噛み砕き、引き千切り・・・

都市自身の持つ自動防衛機構すらも全て突破し、この場にやつて来ようとしている。

ここは重要拠点、都市の中央管理を一括に担っているコンピューターと

最高峰の防衛機構が集中されている建物・・・通称”城”

四方に対しても自動迎撃機関砲がそれぞれ45門ずつ設置されていて、

自動迎撃レーザーやガードロボットによつて守られている。

その建物の内部の通信統括室の中では大混乱が起きていた

「南地区担当第一中隊、応答が途絶えました」

「北地区にて第一中隊、接敵致しました！」

「南地区の第一中隊搜索に第四中隊を向かわせます！」

「西地区担当第三中隊より援軍の要請！」

「援軍として北地区より第六中隊を移動させます！」

「第五中隊より連絡！東地区の第一ゲート突破！繰り返す東地区的第二ゲートが突破された！」

「南地区の第一中隊の搜索に向かつた第四中隊より連絡！第一中隊全滅を確認！」

この都市は”城”を中心に、西から南地区にかけてが居住区画、北地区に食料生産プラント区画、

東地区に武装・衣料品の生産プラント区画である。

そして”城”を中心に円形に都市は広がっていて、大円、中円、小円と並びように、

円形に襲撃対策の迎撃設備を設えたゲートが三重に形成されていて、

”城”には都市内部の人間が非難するように作成されたシェルターが存在する。

地下都市自体がシェルターの役割をしているが、もしもの時用にと作られたものである。

「第一中隊、負傷者多数！」EVEと接触した模様！」

「第五中隊、第三ゲートまで撤退完了。第三ゲートにて迎撃戦を開始します」

第一、第二、第三と外側から順にゲートを数えていく。

・地区状況

- 北地区：第一ゲート突破
- 西地区：未突破
- 南地区：第一ゲート突破
- 東地区：第一ゲート突破

ゲート一つには自動迎撃機関銃20門、自動迎撃光線砲台が5門、

四速歩行型ガードマシンが4機、一足歩行型ガードロボットが50機、

その他に迎撃用の武装やシステムが多数設置されていた

しかし、それがいとも容易く突破されている。

・部隊状況

- 第一中隊：南地区 全滅
- 第二中隊：北地区 負傷者多数 LEBEL2接触
- 第三中隊：西地区 負傷者多数 援軍要請
- 第四中隊：南地区 第一中隊全滅を確認 第一中隊に変わり南地区防衛
- 第五中隊：東地区 負傷者多数
- 第六中隊：西地区

通信統括室では、巨大なモニターと複数の個人コンピューターが存在する巨大な通信室である。

通信員が個人コンピューターにて部隊の様子を纏めて、

情報統括者の個人コンピューターに送信し、

情報統括者がその情報を元に素早くメインモニターに情報を表示すると言つたものである。

そのメインモニターは1秒毎に凄い勢いで表示数値や状況の変化が起きていた。

「第一中隊との通信が途絶えました！！」

「第五中隊との通信も途絶えました！！」

「第四中隊より連絡、南地区の第一ゲートが突破、繰り返す第二ゲートが突破されました！」

メインモニター中央に表示された都市の地図が段々と赤く染まっていく、

こちらの支配圏が緑色に表示され、敵の支配圏が赤色で表示されている。

ドーンドーンッと遠くの方で何かが爆発する音が響いているのが、

段々とこの建物に近付いているのが判る。

メインモニターをひと睨みした跡に、直に通信統括室から出る。

エレベーターに乗り、最上階に向かう。

エレベーターに載つてゐる間ずっと爪を噛み、

階数表示の光を睨み付けていた。

エレベーターが最上階に到達して、扉が開くと同時に足を動かし目的地に向かつ。

？？「市長」

部屋に入ると同時に部屋の中に居る誰かに声をかける。

部屋は適度な明るさに保たれて、

部屋の隅々に至るまでアンティーク品の様な風格の家具が並べられている。

だが、それはそれぞがとても高価なのは人目で判るが、

雰囲氣にあつていらない物ばかりが置いてある。

壁には高価そうな額縁に飾られた絵が飾られていて……いわゆる成金の部屋と言つ状態である。

入り口からまっすぐ進んだところにある木製のデスクには

頭を抱えて震えている初老の男性の姿があつた。

？？「市長、もう限界です」

市長 「黙れ！娘の件もこの件も全てお前の所為だろ？！」

震えていた男はそう言つと手元にあつた灰皿を投げつけてきた。ガゴツとその灰皿がこめかみの部分に当たつて、皮膚が破れ血が流れ出す。

？？ 「市長、もう限界です」

再度同じ言葉を繰り返す。

市長 「黙れえええええ！」

これが蝙蝠獣人の地下都市の最後だった。フルーフルーフーデ

第一一十六話 緊急事態『Hマージョンシー』

今日の討伐のクエストは完了。

クエストカウンターで報酬を受け取つて、次のクエストの準備を始めようとした時であつた。

スピーカー 「緊急事態、緊急事態

ギルド員の皆さんは直ちに集会場に集合してください、繰り返します……」

クエストカウンターに取り付けられていたスピーカーが大音量で警告音を発し始めた。

名無し 「なんだ？」

辺りを見回すと、他のギルド員達が慌てた様子で集会場へと向かつていくのが見えた。

スイレン 「集会場に集合つて言つてる、行くよね？」

名無し 「ああ、何があつたんだろうな」

名無しとスイレンも集会場へと向かつた。

集会場には都市内に残つていたり、クエストが丁度終わり帰つて来た者達が集まつていた。

舞台の上には、髭を蓄えた老人が立つており、その手にはマイクが握られている。

と、横から双剣使いの男があれは市長だと教えてくれた。

市長 「えー、緊急事態宣言です。この都市から12km先にて、魔物と都市防衛システムの激しい戦闘が確認された、そして都市防衛システムが敗北した事も確認できた、

次に魔物が襲うとすればこここの都市かもしだね。」

市長の演説が前置き無しに始まり、あたりの者達はざわめき始めた。

市長 「静粛に、これはこの都市の存続に関わるかもしだん問題じや

攻撃された都市の名称は「ブラッド」じゃ、この都市に関しての情報は殆ど無い。

つい最近保護した蝙蝠獣フルーフクフーデ人もたらしてくれた情報のおかげで、

そこに都市が有る事が判明したのじゃ、そして、その都市が魔物の大群に襲撃され、

殲滅されたらしいのじゃ、そして次の獲物がこの都市になるかもしだん

お主等には直に防衛線の準備をしてほしい。

「ブラッド」の調査じやが、それはこちらで選別した人物にやつてもらつ。

調査は調査者に任せん。そして魔物達の殲滅は狩人ハンターに任せん。

魔物の襲撃は十分あり得る、皆気を引き締めてかかるよう

スポーツタ

そつ言つと、市長は一度言葉を区切つてから、再度言葉を続けた

市長

「なお、以下名前を呼ぶ者はここに残つてくれ。

ハイスピードショットの名無しと多重魔導士のスイレン、

高速射撃の名無しと多重魔導士のスイレン、

月下降刀のミラーズと叩斬者のクルシス、

シャドウダーリズのミラーズと叩斬者のクルシス、

無影戦機の風鈴、

ナバームインフェルノあきはるの闇黒尖弓の白影、

永久煉獄の秋春、

ショットガンカーバルンの絶滅絶望の燐、

以上の8名じや、では己のやる事に全て責任を持て、生

きていれば明日は来る。」

何故か名前を呼ばれてしまった。

ミラーズとクルシスは、スイレン、名無しともに知り合いだが、

後の4名の事は、一つ名と、特徴は教えてもらつたが、実際に顔を合わせたことは無い。

シャドウダーリズ
無影戦機の風鈴

性別は女、年齢は14、年齢は低いが、相当な実力を持つ。

耳着き帽子に、手にはめた実用性の無い肉球の手袋、鼠の尻尾と言う変わつた服装をしている。

特徴的なのは武器である。戦機・・・いわゆる戦闘機械がその少女

ドールズ
バトルドールズ

の武器となる。

戦闘機械は魔力によりその場で量産されるタイプで、何処から転送、転移している訳ではない。

口癖が「チュー」と言ひ鼠の鳴き声の様なので、皆から「ネズ公」と呼ばれている。

ダークサイドアロー
闇黒銳弓の白影

性別は男、年齢は20代後半、忍者の様な格好をしている。

武器は「一つだけにある通り」で、^{げつえい}月影と言ひ名の漆黒の弓を使っている。

魔物だろうが人間だろうが何者にも悟られずに相手の命を刈り取ると言つ、暗殺が得意。

寡黙的であまり言葉を喋らないが、意思疎通は普通に出来る。

この4人の中では結構な常識人。

ナバームインフェルノ
永久煉獄の秋春

性別は男、年齢は20、真っ赤な頭髪の目付きの悪い人物である。

一つ名の通り、炎を使い戦うのが得意。その炎はシェルターの壁をも焼き尽すので、

都市内では絶対に魔法を使うなと厳重に注意されている人物。

ショットガンガンバル
殲滅絶望の燐は、

性別は女、年齢は22、西洋の女ガンマンの様な服を着ている。

二つの読み名にショットガンとある通り、散弾銃を使った敵の殲滅が得意である。

使う武器は自分で改良した、機関散弾銃（機関銃の弾丸を散弾に変えた物）を使っている。

武器に「ダーリン」と言ひ愛称を付けており、少々変わった人物らしい。

第一一十七話 調査準備

集会場にある舞台横の所に呼び出された8名と、市長代理の秘書の女性、

そして何故か蝙蝠獣人スミレフルーフフーデが居た。

秘書 「ここに集まつてもうたのは実力があるので適任だと判断されたからです。」

秘書の女性が話を切り出す。

風鈴 「チユツ? 私達が実力者なのは判るよ~そこのお兄さんとお姉さんに蝙蝠獣人フルーフフーデの子は?」

リュウの横で、耳着き帽子の耳と、腰の辺りにつけられている尻尾をひょこひょことせわしなく

動かしている少女が、名無しとスイレンとスミレを指差して質問をした。

秘書 「そこの男性は高速射撃クイックショットの名無しさん、

女性は多重魔導士のスイレンデュアルソーサリーさん、

この人は情報提供者である蝙蝠獣人フルーフフーデのスミレさんです。」

秘書は淡々と説明だけをする。

秋春 「けつ、ひ弱そつな野郎じゃねえか」

真っ赤な頭髪をした、目付きの悪い男が「さうをジロジロと見てくる。

燐 「スイレンちゃんかしら？私の好みだわあ～」

背中に機関銃を背負つたガンマン風の衣服の女性がスイレンをうつとじと眺めている。

白影 「話が進まん」

忍者の様な格好をした鋭い目つきの男性が話を進めると遠まわしに発言する。

秘書 「とりあえず、自己紹介は後ほどやつてもらいます。今回の緊急招集の内容について今から説明致します。質問等御座いましたら遠慮無くお申し付けください。」

そう秘書の女性が切り出し、今回のクエストの説明を始めた。

ここに呼び出した人達は**狩人**、**守者**、**観測手**

の三通りの職種の者を集めた。

ミーフーズと**風鈴**が**守者**、**白影**が**観測手**で、

それ以外が全員**狩人**である。

ここに集めた者にやつてもうつ事は、

フルーフフード 蝙蝠獣人の小規模地下都市「ブラッド」の記録調査である。

防衛線を張るに張るにあたつて、襲撃を行つた魔物の情報を保管した記録が、

ブラッドの都市管理用機構に保存されている可能性が高い。

その記録の回収と都市内部の様子の調査が主な任務である。

今回の調査には、都市の内部を詳しく知つており、都市内部へと続く秘密の通路の

ありかを知つてゐるスミレも同行する事になった。

そのため、スミレの守者として、ミラーーズと風鈴を、

都市の調査の為に白影を、魔物討伐の為に名無し、スイレン、クルシス、燐、秋春を、

そういう具合で集められたのがここに居るメンバーである。

今回の緊急招集での異存がある者は直ちに申し上げるといつ事になつたが、

名無し、スイレンは今の所手がかりが何も無く、何をしたら良いのかも判らないので断る理由はない。

ミラーーズ、クルシスは特に何も言わなかつた。

風鈴は「ノーノーノ笑顔でチュー・チュー言いながらスミレに抱きつこうとした。

燐はそんな風鈴とスミレの様子を見ながら「異存は無いわよ?」と言った。

白影は「己も異存は無い」と燐に続いて肯定していた。

秋春だけが「めんでえ」とぐちぐちと言っていたが、

最後は結局参加する事になった。

全員の承諾が取れた事を確認すると、秘書の女性は
「行きの移動は徒步で行い、帰還は調査先の都市で使えそうな
輸送車や軽戦車もしくは装甲車等を探してそれで帰還してください。
薬品や弾薬、それから武装等で欲しい物があれば、取引所に申し出
ておいて下さい。

出立の際にお渡し致します。では、私はこれで失礼します。
と事務的な言葉を投げかけてから、去つていった。

その後に残された白影とスイレン、クルシスとミラーは、

今回のクエストに必要な物を話し合い初め、

風鈴はスミレに抱きついてうつとつとした顔で「チュー・チュー」と
鼠の鳴き声の様な声を上げながら

頬ずりを続けていて、燐がそれを恍惚とした目で見ている。

秋春は何故かこちらを物凄い眼力で睨み付けてきていた。

と、秋春がこちらに歩み寄ってきた。

秋春 「雑魚が調子に乗ってんじゃねえぞ」

そういう残すと、秋春は去つていった。

風鈴 「おにーさん、あの人言つ事は気にしなくて良いチュー」

その様子を頬ずりしながら見ていた風鈴が声をかけてきた。

といふかずつと頬擦りをされていて、スミレは鬱陶しくないのだろうか？

表情にまったく変化が無いのでその心中を察する事は難しそうだが

⋮

名無し 「ああ、大丈夫だが・・・嫌われているのか？」

燐 「違うわよー、妬んでるだけよー」

そこに横から燐が声をかけてきた。

燐 「あの子ねえ、自分以外にちやほやされてる子を見るのが嫌いなのよね」

燐 「…」
燐 「いややせや？」

燐 「…」
燐 「…」
燐 「…」

燐 「？」

燐 「不思議そつな顔、可愛いわあ、惚れてしまこわい」

行き成り燐が「…」と叫びてきましたので、つこー、三歩ドガつてしまつた。

燐 「やあね、[冗談] やあね [冗談] それよりも荷物の準備しなくちゃね
」

セツリ「…」、燐はと身を引いて、怪しい笑みを浮かべていた。

その様子を見ていたスイレンは、燐とこつ女性が名無じに近づいた時に感じた、

チクリとした胸の痛みに疑問を覚えた：

この痛みは何なんだらん？

第二十八話 防衛機構

センサーに反応あり

都市内に侵入者発見

侵入者の情報の収集を開始

戦闘員 . . . 7名 . . .

魔力の付加が確認される通常種の人間

魔力値 : 40000 ~ 8000

武装 : 剣2名 弓矢1名 機械人形1名 魔法2名 銃1名

全員が防御魔法の掛かった衣服を着衣 進行中の部隊展開状態から
非戦闘員を守護する事を

最優先目的として活動していると見られる。

非戦闘員一名 . . . 都市内の住人リストに登録された少女 . . .

住民番号120030番、名称 : スミレ 年齢 : 11

情報不一致者一名 . . .

人型をしているが種族が特定不可能 . . .

人間と仮定した場合の情報 . . .

魔力の付加が確認される通常種または獣人種の人間

武装から戦闘員であると予測

魔力値・測定不能

武装・銃 防御魔法のかかつた衣服を着衣

魔物と仮定した場合の情報

LEEBEL・3 タイプ・ヒューマノイド 許容魔力・測定不能

人間と行動を共にしている。魔力により人間を騙し行動している可能性有り。

侵入者の進入経路確認中

確認完了

進入経路第一緊急避難通路として利用されていた通路から進入

南側地区第一ゲートの確認

稼動可能な一足歩行型ガードロボットの確認

完全状態で存在する個体無し

武装のみの破損にて稼動可能個体が1機

下半身を消失した個体が1機

破損個体の修復

修復システムの異常を確認

個体の修復は不可能

武装のみ破損個体

個体のシステムを稼動

稼動を確認

感覚情報デバイスの接続

接続の完了

メインカメラの稼動を確認 · · · · ·

視界が点滅する

目の前に表示されていたモニターと重なつて別の映像が情報としてメモリに流れ込んでくる。

???? 「個体型のデバイスとの接続に一時的にプロジェクトをかけます」

つい口から漏れたその言葉も次の瞬間には聞こえなくなる。

感覚デバイスの接続を確認 · · · · · 接続の完了

動作デバイスの接続を確認 · · · · · 接続の完了

ピピピピピと電子音が頭の中で響き渡る。機械の眼を動かしてあたりの確認をする。

ガードロボットの格納庫の中であるが、 照明のシステム系統に異常が発生している為真っ暗である。

メインカメラのモードの変更 · · · · ·

通常状態から暗視モードに変更 · · · · ·

変更が完了

ウイーンッとカメラのオートフォーカスの稼動音がすると同時に、真っ暗な視界がやや不鮮明だが辺りの様子が見えるようになった。

再度辺りを見回してみる。

整備用の台に固定された腕を動かしてみる・・・

ブチブチッとケーブルの干切れる音が響き、視界の中に自らの腕が現れた。

肘の辺りから引き千切れ、ケーブルがだらりと垂れている腕が腕の先に稼動情報を送ろうとすると、垂れているケーブルがビクッビクッと痙攣する。

あまり見ていて気持ちの良いものではない。

今度は足を動かしてみる。

またしてもブチブチッとケーブルの干切れる音

足の状態は普通である。

稼動状態から、両腕が引き千切られているだけで足の稼動には問題が無い事が確認できた。

整備用の台から立ち上がり、格納庫の扉へと向かう。

扉は堅く閉ざされていた

南側区画第一ゲートの防衛機械人形格納庫

扉のロックを解除 失敗

下半身の消失した個体

個体のシステムの起動 起動を確認

武装システムの起動 起動を確認

装備中の機関砲の標準の設定 設定の完了

下半身の消失した機械人形が右腕につけた機関砲を扉の方へ向ける。

ドガガガガガガガンッと機関砲が火を噴いた。

扉が吹き飛ぶ。

その扉から両腕を欠落した機械人形が外に出た。

その動きはまるで人間の様に滑らかで…

第一十九話 機械人形『オートマタ』

足音がカツンカツンと響く合金で作られた通路を、周囲を警戒しながら進んでいく。

足音は5人分。

通路を歩いている人数は9人である。

足音が4人分足りない理由はちゃんとある。

白影は^{スニーキング}隠密行動を基本としているので、足音をたてないのは当たり前である。

衣擦れの音や武具の接触音も全くせず、存在感も感じない、まるで影の様についてきている。

ミラーズもどちらかと言えば隠密系の行動を得意とするので足音をたてない歩き方をしている。

そして意外なのだが、燐もまったく足音をたてていなかった、

背中に機関銃を背負つていて、衣擦れや武具の接触する力チャカチヤと言づ音すら立てていない。

最初の印象がアレなために、この女性は少し特殊だと思つてはいたが、

音を立てずに行動する事が出来る程の実力者だとは思わなかつた。

そして、もう一人音を全く立てずに歩いている人物が居る。

履いている靴は金属とゴムの織り交ぜられた靴底のマーチングブーツである。

金属部分が床に接触する時の音がしそうなものだが、それも全くしていない。

そして腰のポーチと背中のバッグ、腰のホルスターの接触音や、衣擦れの音もまったくしていない。

ただ、白影と違い、存在感は完全に消すのではなく、辺りに紛れ込むと言った感じである。

そんな不思議な歩き方をしているのが自分なのである

そのことに関して戸惑いはすれど、さして驚いてはいない。

戦闘技術に関してアレだけの技術があるので、

他にいろいろな技術を持つていたとしてもさして驚くほどの事ではないという判断だ。

通路は非常灯によつてぼんやりと照らされてはいるが、

所々の非常灯は破損していたりするので、所々が完全な暗闇に包まれている。

その闇に包まれた空間に何者かが潜んでいる可能性と、

その闇に隠れる能力を持つている魔物のリストが頭の中に浮かんでは消えを繰り返している。

先ほどから無意識に横を歩いているスイレンに話しかけてしまつていい。

その度に、何故か自分は顔を背けてしまつて、ぶっきらぼうな感じになつてしまつ。

薄暗い通路に動く影といえば自分達の影だけで、他には何もない。まるでお化け屋敷の様だなあーと場違いな感想を頭の中で浮かべてから、

横を歩いているはずの名無しの様子をちらりと確認してみる。

横を見れば確かに名無しは自分と並んで歩いている。

だが、ひとたび視線を前に戻すと、横に居るはずの名無しの気配は感じられなくなる。

名無しは忙しく視線をちらりと色々な場所に移しつつも、時折私に声をかけてくる。

「大丈夫か？」等の事務的なやり取りで、顔を背けていて、ぶつきらぼうな声だが、声をかけられると、

心がほつとするのである。見ず知らずの男の箸だが、どうしてだろう？

と名無しの横顔を眺めつつも、その横を歩く。

名無し 「誰か居るぞ、え？」

いきなり自分の口から出た言葉に驚いて、ポカーンと口を開けて立ち止まってしまった。

秋春 「おいてめえ、『冗談言つてるとぶち抜くぞ』

先頭を歩いていた秋春が振り向いて、銃の形にした手の人差し指をこちらにむけてきた。

指先から炎がチロチロと蛇の舌の様に出ている。

風鈴 「チユッ？笑えない『冗談はやめてほしいチユ』

耳と尻尾をせわしなくピコピコと動かしながら、振り返つて名無しを見た。

燐 「ん~『冗談じやないっぽいわねえ』

燐は背負っていたはずの機関散弾銃を腰溜めで構えている。

白影も月影に矢をつがえ、弦を引いて通路の先の影に狙いを向けていた。

クルシス 「短い付き合つだが名無しは「冗談言つ奴ぢやないぞ」

ミラーズ 「確かに・・・」

クルシスとミラーズが名無しをフォローしてくれる。

名無しの横ではスイレンがいつの間にか短剣舞踏ナイフカーニバルを発動させて名無しに寄り添つっていた。

名無じと田ヒツヅが合つて、疑問符を浮かべて首をかしげた。

スイレン 「何で私ナイフカーニバル短剣舞踏ナイフカーニバルを?」

名無じ 「俺に聞かれても・・・」

ウイーナンツと機械の駆動音が、白影が狙いを定めた闇の中から聞こえてきた。

スミレ 「防御機構、あの形状は南地区のガードロボット」

淡々と敵の情報をスミレが呟いているが、名無しの頭の中には、

そのロボットの駆動音から導き出された防御機構の形状、武装、性能が表示されていた。

影からゆっくりとその機械人形が出てくる。

顔から徐々に灯りに照らされ、その機械人形の様子が判る様になる。

影から歩み出でたのは、機械の駆動音を響かせる、執事服を着た青年であった。

？？？ 「問、貴方方…この……に何…に来た…ですか？」

その声は女性の声に聞こえたが、

壊れたスピーカーを使つてゐるのか、音が所々割れつていて聞き取り辛い。

影から全身が現れて、その全容を見て、皆が驚いて息を止めた。

その機械人形は両腕が肘の辺りから引き千切られていた……

第三十話 人工知能

両腕の肘から先が無いその機械人形……見た目は執事服を着た青年
だが……

？？？ 「再度問います。貴方方は何をしにこの都市に来たのでし
ょう」

その瞳の部分だけが微弱な光を放つてゐるのか、まるで魅入られる
かのような感覚に囚われる。

クルシス 「この都市の調査だが、お前は何者だ？」

背後に皆を庇うような立ち位置に移動したクルシスが大剣の柄に手
を添えつつも、

質問に答え、こちらからも質問を切り出した。

スミレ 「小規模地下都市の管理用のマザーコンピューター、アリ
ス」

風鈴に抱き付かれながらも、何も言わずにいて來ていたスミレが
話し出した。

スミレ 「この都市の防衛システムから生産システム、空調に天候
の全てのシステムを

全部管理している人工知能を搭載したコンピューター、そ
れがアリス」

燐 「あら~。と忙つ事は、」の子が」の都市を守護してゐる訳ね？」

腰溜めの姿勢を崩さずに、油断無く銃口をアリスに向けながら言葉を発した。

アリス 「都市の調査、判りましたメインサーバーへのアクセスを許可します。

「」の機械人形についてきてください。都市内にはもう魔物は居ませんので」

と、アリスと言ひらし機械人形は、それ以後何も言わずに通路を歩いていった。

ミハーズ 「ついてつて平氣かしら？」

「 秋春 「大丈夫なんじゃねえのか？」

風鈴 「ん~罷つて可能性もなきにしにあらずだよー？」

燐 「風鈴ちゃん、なきにしもあらず、が正しいわよ
白影 「どうする？」

スミレ 「あのコンピューターなら信用して平氣よ」

後方で、秋春達が相談を始めたが、機械人形はどんどん先に進んでいるので、

仕方なくついて行く事になつた。

人工知能を搭載したコンピューターのと書つのは今となつてはそれ程珍しいものではない。

基本的な判断は勿論の事、感情表現も可能の人工知能が開発されたのは八十年ほど前のことである。

今となつては、一部の人工知能を搭載したコンピューターが暴走しているが、

基本的に都市の管理をしているコンピューターは、人間の種族の者に対する攻撃は行わない。

人工知能搭載の条件として第一に人間に危害を加えてはならない。

第二に人工知能搭載型の機械は攻撃目的の兵器として存在してはならない

第三に人工知能は自分自身のプログラムの書き換えをしてはならない。

人工知能には以上の三ヶ条がかせられているので、

人間の種族の者に対する攻撃してこないはずである。

魔物は都市内には居ない。

その言葉は本当の様で、都市内部の居住区画に建設された建築物の
大半が
半壊、もしくは全壊しており、完全な状態で残っている物は殆ど無
く

通路は瓦礫と魔物の骸で埋め尽くされており、

濃密な魔物の血独特な匂いが居住区画全域を覆っていた。

防衛機構の一部である第一から第三のゲートの所は特に魔物の血の
匂いと、

火薬の匂い、魔法によって引き起こされた炎の独特の匂い、が漂つ
ている。

そして、微かにだが人間の血の匂いも漂つている。

ゲートの所には四足歩行型ガードマシンが力尽きて大地に横たわっ
ていた。

四足歩行型ガードマシンの見た目は背中に多数の重火器を付属した
四足歩行の獣である。

勿論一足歩行型ガードロボットも多数が腕を引き千切られたり、

腰の辺りで切断されたり、首を千切られたりした物も多数転がっていた。

見た目が執事服の青年を模している為、千切れた腕や足の部分からコードが延びていたりするが、

それを踏まえても相当な地獄絵図である。

第一から第三のゲートを通過すると、中心部分には大規模な防衛戦闘が行われた痕があった。

これまでのゲートの部分の魔物の骸の数とは比較にならない程の骸が山積みになっている。

そして、これまで以上に魔物の血に混じつて人間の血の匂いが濃い。

アリスと名乗つた擬似機体を操る都市管理人工知能は、

道端に転がっている魔物の骸の横を何も言わずに通り過ぎていく。

今の所感知出来る範囲内に魔物は存在しない。

そこで行き成り田の前に現れた巨大な建造物に少し驚いた。

防衛戦闘の痕ばかりに気を取られていたが、この建造物の防衛機構は相当な物だと判断できる。

だが、その防衛機構を全て破壊しつくした魔物はいったいどんな化け物なのだろう？

転がっている魔物の死体を見る限り、この防衛機構を破壊し尽す事が出来る魔物はいなはずだ。

そんな事を思つていると、アリスが歪んだ扉の前で立ち止まり、振り返つた。

アリス 「電源回路自体は生きていますが階段を使って登つて来て下さい。

五階層に存在するメインサーバールームに居ます。」

ブウンッと電子音がたつた後、アリスの操つていた機体が動かなくなつた。

皆で顔を見合わせた後、白影が先行して中に入つていった。

その後を名無し達が続いて入つて行く。

第三十話 人工知能（後書き）

作者様がログインしました。

名無し様がログインしました。

作 「やほほーい」

名 「……え？ 第三十話であとがき2回目？」

作 「はい、そつなんです。記念すべき2回目のあとがきですよ？」

名 「作者、おい作者」

作 「何ですか？名無しくん」

名 「そういう事だ、おい

作 「主人公、記憶喪失、名前以外なにも覚えてない、これ、ありがち。」

名 「まさか、ありがちだから名前も忘れさせてしまえと？」

作 「Yes！」

名 「……んで、俺の持つてるF09-10つて回転式拳銃は何だ？主人公の武器が剣つてのがありがちだから遠距離武器にしたのか？」

つか、よりもよつて魔導銃つて設定かよ、
それこそありがち過ぎんだろ」「ひ

作 「えー、私ですね。銃が好きなんですよ。
まあ、詳しい構造とか知らないですが、
こう、何か好きなんですよねえ」

名 「作者が銃系が好きだから主人公の武器は銃になつたと?」

作 「良いでしょ?回転式拳銃だよ?実は回転式ライフルとか
憧れたりしてるんだよね。こう、弾装部分がリボルバーと同じ
方式

のライフルね、憧れね?格好良いよね?

ちなみに主人公の持つてる長銃は見た目がSIG SG550
で、

Fog-10がトーラスレイジングブルのModel 1480レ
イジング・ブル

のトリガーガードが分厚く、頑丈に作られていて、
トリガーガード部分と銃口の下の部分と銃身の中程に
金具が取り付けられていて銃剣が装着可能です
ちなみにFogの意味は霧、濃霧つて意味です。
銃の取り扱いの難しさから、五里霧中をイメージしたんだが、
良く思つたら、意味全然違つじゃんね?気にしてないけど」

名 「銃の名称え:気にしてないなら良いか:良いのか?
とりま、銃剣つてイメージはあれか?ガンブレードか?」

作 「は?ガンブレード?あれつて弾でねえじゃん、ツマンネ」

名 「え?いや、あれみたいな見た目になるのか?」

「微妙に違うな、刺貫には向かないぞ？」

「だって、剣先は銃口になつとるし。」

ガンブレードで斬撃の威力を、弾丸発射の振動を利用して飛躍的に上げた物だろ？」

正直、高周波ブレードと何が違うのか理解できん。むしろ、射撃のタイミングに気を使わないといけない分ガンブレードのが使いにくいんじゃね？」

名 「あー、俺が悪かった。話が逸れてる。」

それで、もう一つの回転式拳銃だが……名前なんだつた？」

作 「Faithful-02だな、こつちは通常弾丸も使える仕様だ。

Faithfulの意味は、忠実とかそういう意味だったと思う、

見た目は、コルトアーナコンダとまったく同じ。但し、初期状態から銃剣装備してるので、見た目は銃下部に短剣の刃の部分が取り付けられてる感じ。トリガーガードから銃口にかけての刃だな。銃口から5~10cm程だが先に飛び出している。勿論着脱可能。完全固定式とは違うのだよ」

名 「あー……えらく饒舌だなおい」

作 「ん……まあね、武器の紹介は憧れてるしねちなみに、機関散弾銃に関してだが、やつちまつた感があるが、後悔はしていない。唯、物凄く反省してます。」

名 「何故だ？」

作 「だつて、機関散弾銃だぜ？作者の俺ですら想像できねえよ。
どうしてもU·S·A S12しかでてこねえって、
あれつてM4カービンに似た構造だろ？
機関銃じやねえーじやん。」

名 「あー、俺にはわからん。

作 とりあえず、散弾は近距離用の弾だから
銃自体を出来るだけ軽量化して接近して使う物だと思うんだが？
それを重たい機関銃の弾丸つてそこらへんはどうなんだ？」

名 「俺の考えてる脑汁ダダ漏れ妄想では、

作 散弾の一粒一粒に魔法的効力が封入可能で、
同時に複数の魔法が使える最強の弾丸だと言つ事になつてる。」

名 「ああ…一粒一粒にねえ…あれ？主人公の武器より目立たね？」

作 「え？主人公の武器が目立たないの駄目なの？そんなの初耳」
名 「普通主人公が目立つだろつ！
何で他の登場人物目立つ武器持つてんのー
逆にこっちが聞きたいつつのー！」

作 「ええ…だつて、主人公が回転式拳銃もつて、
自動式拳銃まで持つたんだぜ？
そこに、ライフルまでプラスしちゃつて、
出血大サービスじやね？
その上で他に武器持たせたら
一つ一つの武器の描写少なくなるじゃんつ！」

そんなのいやだいやだーー

名 「〇〇、把握。俺なんか疲れたからログオフするわ」

名無じ様がログアウトしました。

作 「おー、今回も名無じくんがお別れの挨拶してくれるんじゃないのか？」

まあいいか、読者の皆様へグダグダドロドロですが、最後まで更新するので楽しみにしてねえー

作者がログアウトしました

第三十一話 一方的虐殺『ワンサイドゲーム』

メインサーバールームには、大規模型のサーバーが多量に設置されている。

サーバーの放つ熱を、冷房設備が冷やし続けている。

アリス 「では、提示を希望する情報を指定してください。」

サーバールームの中央部分にぽっかりと空いた空間。

そこには何らかの液体に満たされた生命維持装置の様な筒状の装置が設置されていて、

その溶液の中には女性が入つており、その女性が先ほどのアリスと名乗った

都市管理人工知能の本体のデバイスであるらしい。

クルシスが視線を漂わせて頬をかき、秋春も困った様にそっぽを向いている。

白影は特に気にせず物珍しそうに円筒形の装置を眺めている。

名無し自身は急に目が真っ暗になつたので少し戸惑つたが、

スイレンが背後から眼を塞いで「見ちゃだめ」と言つたので大人しくしている。

そんな男性陣の様子を擬似デバイスの瞳で見ていた。

そんな客人の様子を擬似デバイスの瞳で見ている。

アリス 「再度問います提示を希望する情報を指定してください」

無機質な瞳に皆を映しつつ淡々とした言葉を再度続けた。

ミラーズ「はあ、男共が役に立たないわねえ、とりあえず都市が襲われた時の状況は?」

呆れたようにミラーズが男性人を睨み付けた後に、アリスに指示をだした。

アリス 「畏まりました。

襲撃された時間は18:23、全滅した時間は19:28

襲撃時の魔物の種類別のおおよその個体数は、

黒獵犬、闇黒狼、牙獸等の

動物の変異種である魔物が3000匹程

骨格兵、死体人等の人間の変異種である魔物が200匹程

一部にLevel2らしい個体を確認。都市内部の防衛線の映像を御覧になりますか?」

ミラーズ 「重要拠点の防衛戦闘だけを表示して」

アリス 「了解いたしました。」

表示された映像は城の防衛戦闘の様子であった。

多数のガードロボット、執事服を着た青年の姿をした機械人形が、

マシンガン アサルトライフルスナイパー ライフルショットガン
機関銃や突撃銃、狙撃銃や散弾銃等で迎撃を開始した。

防御壁にわらわらと寄つてくる魔物に攻撃開始した。

だが、魔物に命中した弾丸は弾かれ、あらぬ方向に飛んでいく。

フルメタルジャケット
被覆鋼弾やソフトポイント弾ばかりを使つている防衛機構では、
硬質化した魔物の皮膚を貫く事は出来ず、弾かれてしまふのは当然
の事である。

その所為で魔物の大多数に對してまともにダメージを与える事は無
く、

防衛戦闘でありながら、まるで ワンサイドゲーム 一方的虐殺の様に見えてしまふ。

……防御壁に寄り付いた魔物が液体を吐きつけた。

液体が防御壁に付着した瞬間に多量の煙が発生して、次の瞬間には
壁が溶け始めた。

フルクーポン
防衛隊に配属された蝙蝠獣人が慌てて機械人形に命じて弾幕を激しくする。

しかし、それは兆弾による自滅を招く結果になつただけである。

その間にも壁が溶かされ、壁に穴が空いた。

その穴から小型の魔物が進入を開始した。

蝙蝠獣人フルーフーフーデが慌てて進入した魔物を迎撃するが、

倒しても倒しても魔物は殺到するばかりで数は一向に減らない。

……使つていた銃器の弾薬の補充行動をどうとした蝙蝠獣人フルーフーフーデを魔物の一匹が押し倒す。

そこに数匹の魔物が群がる。服や鎧、装甲を切り刻み、肉や内臓を貪る。

その蝙蝠獣人フルーフーフーデは瞬間で骨だけになる。それを見た他の部隊員は逃げ出そうとする。

背を向けた背後から飛び掛られ、同じ様に肉を貪られ、骨だけにされる。

魔物にかかれば軽装甲鎧等紙切れに等しい…

判つてはいたがここまで酷いとは思つても見なかつた…

城の防衛戦闘開始から23分53秒・配置されていた防衛隊員の生命反応の消滅を確認

城の防衛戦闘開始から43分34秒・防御機構の破損率が70%を突破を確認

城の防衛戦闘開始から53分24秒・シェルターの防壁の破壊を確認

城の防衛戦闘開始から60分00秒・都市内部に存在する人間種の生命反応の消滅を確認

都市防衛機構の敗北を確認・・・重要拠点の半数が使用不可能

以上が都市管理人工知能が保管していたデータであった。

部屋の中は静寂に包まれていた。響くのはサーバーの稼動音と空調管理装置の音のみである。

先ほどの映像が余りにも残酷で、余りにも嘘染みていて、そして自分達の未来の様で：

皆が言葉を失う。

ミラーズ「襲撃を受けた理由は？」

その静寂をミラーズが思い切ってやぶつた。

アリス「襲撃の理由で御座いますか？」

確実な理由かは不明ですが、スミレお嬢様の捜索の為に頻繁に都市外部へと調査隊を送っていたのが一番可能性が高いです」

リースの問いにアリスが答える。

スミレ 「やつぱり……馬鹿な叔父様」

突然背後から聞こえた声に振り返ると、スミレは嘲笑を含んだ笑いを上げていた。

そして、笑いながらも明りを捉える事の出来ぬ瞳からは……涙があふれ出ていた……

第三十一話 人工知能『アリス』

都市管理用マザーコンピューター”アリス”

見た目は桃色の長髪、すらりとした手足、バランスのとれたボディの、

擬似デバイスを基本的なボディとして使用している。

その擬似デバイスは現在、目の前の調整用の容器に入れられている。その様子を詳しく見ようとすると、スイレンが後ろから眼を塞いでくるので

詳細は判らないが、一糸纏わぬ姿であるらしい。

擬似デバイス自体は相当細かい所まで作りこまれていて、

重量と質感以外は人間とそういうして変わらない見た目をしている。

まあ、簡単に言えば人間の女性が裸の状態で、

液体の詰まったガラスの筒状の容器の中に浮かんでいふと言つ状況だ。

かなり艶かしいが、相手は人間ではなく機械である。

そんなのを見ても欲情する訳がないのだが、スイレンは後ろから眼を塞いでいる。

と言つて眼を塞ぐ以前にこの部屋の情報は全て頭の中に保管されたので、

眼を瞑つていてもこの部屋を歩き回れるべからうであるのだが

そんな事を言つと色々と言われそつなので黙つておいた。

背後から眼を塞がれているので辺りからの情報は基本的に音と空気の振動で感じ取っている状態だ。

気がつけば眼を瞑つているのに辺りの様子がつゝすりとぼやけた感じで判る。

細かい材質はわからないし、光の濃淡も判らない。

例えて言つなら赤外線サーモグラフィーの様な感じである。

背後からスミレの嗚咽が聞こえてくるが、スイレンに背後から手を塞がれている今の自分に出来る事は

何もないの、この事に関してはワーネーズに任せやる。

涙をポロポロと流してくるスミレの頭を胸にかき抱く様にして、

ミハーネが頭を撫でている。そんな様子を空気の動きで感じつつも、アリスに指示を出す。

名無し 「この都市に残された物資は使い物になるか？」

アリス 「大型銃器や兵器類は魔物襲撃の際に破壊されてしまいま
したが、

小型銃器やステルス型の輸送用車両等はまだ使用可能です。

食料や衣料品等の物資は大多数が腐敗及びに変異物質が付
着している物ばかりです」

淡々と説明を受ける。

燐 「だつたら私達はその輸送用車両に使える銃器等で武装を
して、それで都市に帰還、

それが最善の策だと思つただけれど、どう思つ？」

機関銃を撫でていた燐が立案をした。

風鈴 「私もそれでおつけチュー、そっちの方が守り易いチュー」

暇そうにポーチの中を漁つていた風鈴がそれを承認。

秋春 「都市に通信するのが先じゃねーか？」

出来るだけアリスの方を見ないよつこしながら、秋春が発言する。

クルシス 「俺は先に通信をしたほうが良いと思うが…後、^ト転移装置を使えば早いと思うが？」

秋春と同じ様に視線をそらしつつクルシスが発言した。

ミラーズ 「あのねここは非登録の都市なのよ？そこの通信装置が登録済みの都市と同じ波長領域を

使っている訳ないでしょ、合わせるのに時間がかかるだろうし、^ト転移装置も同様の理由から、だから通信と転移装置は無理ね」

秋春とクルシスの意見を、スミレを優しく撫でながらミラーズが切り捨てた。

燐 「だつたらアリス、武装を輸送車両に移動速度を低下させない程度に積み込んで、

応急で良いから武装車両にできるかしら？」

アリス 「所要時間20分ほどで完了致します。車両の用意はどうちらにすればよろしいですか？」

燐 「どこの門が使えるかしら？」

アリス 「西側の住居区画の門が破損状態が一番少なく、車両の通行可能な門です。」

燐 「だつたら、その使える門から出る為のナビゲート情報を車両に入力、それから

この中央の建物の入り口に車両を止めて頂戴」

アリス 「疋まりました、車両の武装化を含め、ここに到着するまでにかかる予想時間は

30分となつております、時間までは六階層に存在する仮眠室で休憩をしていてください。」

そう言つと燐とアリスが話を終える。すると、アリスは目を閉じ、動かなくなる。

サーバールームに存在する一部のサーバーの稼動音が大きく響き、虚空にモニターが映し出される。

モニターに表示されるのは、輸送用車両の図面と、その図面を元に武装化後の図面が表示されている。

ミラーズ 「皆、仮眠室で休憩しましょうか、スマレちゃんも調子が悪いみたいだし」

ミラーズの一言に皆が賛成して、最初に居心地が悪そうにしていた、

クルシスと秋春が仮眠室へと向かい、次に白影が燐と風鈴に付き添うようにして仮眠室へと向かい、

ミラーズがスマレに何か言葉をかけながら、手を貸してメインサーバールームから出て行つた。

残されたのは名無しとスイレンと田を瞑つて動かないカプセルに収まつたアリスだけである。

スイレン 「私達も行こ」

そう言つと、スイレンは強引に召無しの腕を引っ張つてメインサー
バールームを後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2189y/>

消失した記録～ロストメモリー～

2011年12月5日20時00分発行